

官能のプリマ

バージョン I

M

アカマル

目次

1. Mに問う声	3
2. カメラマン	7
3. プリマ誕生	16
4. ヴァイオリン	25
5. 逆転	29
6. 記念写真	33
7. 暴虐	37
8. 官能の果て	44
9. 崩壊	53
10. 断崖	59

「夢のような話をしようか」

振り返った彼は私の目を覗き込むようにして、よく通る美しいバリトンで言ったのだ。

今日初めて聞く誇らしい声音に驚き、反射的に聞き返そうとしたが、彼はすぐ背中を見せ二、三步踊るように歩いて、そのまま日本海へと張り出した断崖から海へ落ちて行った。

残された私に向かって、海から吹き上がって来る風があまりに強かったので、ひょっとすると彼は、鳥のように再び舞い上がって来るかもしれないと思ったのだが、いつまで待っていても冷たく強い季節風に私は、煽られるばかりだった。

私の思いが甘かっただけだ。彼が鳥になるなんて、とてもできない相談だった。

だって彼は、生まれたときと同じ素っ裸で後ろ手に縛られ、肛門には黒い皮鞭の柄を深々と突っ込まれていたんだ。そんな姿の彼が、鳥のように舞い上がって来るなんて事は、とても許されるものではなかった。

しかし、と私は思う。

取り残された私はいったいどこへ行けばいいのか。なんのために彼の希望を入れて、こんな地の果てのような場所に来たのか。なぜ、初冬の日本海が見える断崖で震えていなければならないのか。

私は無性に腹が立った。

おまけに右手はまだ、彼の肛門へと続いていた鞭の先を、しっかりと握っていたのだから呆れる。

私は寒さに震え眉を寄せながら、彼の遺品となったに違いない黒い皮鞭を手元にたぐり寄せた。鞭の柄に思わず鼻先を寄せると、彼のきつい排泄物の臭いがする。急に懐かしさがこみ上げ、頬に涙が流れた。

両手で彼の体温を感じ取ろうと撫でさすってみたが虚しく、冷え冷えとした皮革の感触だけが両手のひらに残った。

この鞭は、彼が凄いで速度で断崖から海へ落ちて行くとき、私と彼とを真っ直ぐに繋いでいたのだ。この右手は鞭の柄が彼の肛門から抜ける瞬間、ぴんっと張った鞭先を通して、彼の全体重を一心に支えたはずだったのだ。

しかし今、右手は何の感覚も残していない。

私は大切なものを取り逃がしてしまったような気がして、鞭を握った右手を嫌々をするように激しく振った。手元を離れた鞭は闇に紛れるように飛び去り、彼同様、断崖の上から暗い海へと落ちて行った。

もう私には何も残ってはいない。

やはり彼は逝ってしまったのだと、いまさらながらに思い知ったが、もはや頬を流れる涙もなく、ただただ冷たく強い季節風を全身に感じるだけで、私は逃げるようにヒーターの効いた車へと急いだ。

1 Mに問う声

真夏日と熱帯夜が、耐え難いまでに連続したころ。

その日、初めて会社をさぼった。

午前九時に目覚めた私は会社へ電話を入れた。私の勤める会社は小さな広告代理店なので、むろん交換手などはいない。思っていた通り学生アルバイトの木村が、眠そうな声で受話器を取った。

「どうしたの。徹夜」

「当然でしょう。あんたは怒って帰っちゃうんだから。俺が徹夜しなければ、あのポスターは印刷に回りませんよ」

昨日私は、くだらないことで課長と対立した。れっきとしたデザイナーの私が事務屋の課長に、制作現場での決定にとやかく言われる筋合いはないと思ったからだ。

「締め切りに間に合わないと思って電話を入れたんですか。確かに、あんたの気持ちは分からなくはないけど、きっと今日は休むんでしょ」

「ずいぶん分かりが早いじゃない」

「当たり前ですよ。でも、課長も最低ですよ。いくら居酒屋のポスターだからといって”暖まります”というあんたのコピーを”やはり冷たい方がいい”なんてコピーに直せだなんて。利ぎやの多い冷酒の方を売りたいだろうからなんて言たって、ふざけた話ですよ。だいいち季節感がない。秋冬用のポスターって事が分かっちゃいないんですよ」

「まあとにかく、私のデザインで印刷に回せるようにしてくれたのね。ありがと。あなたの見込み通り私は今日休みにするから、後はよろしくやっといてよ」

「そんなこと言ったって俺は、あんたがいなけりゃ課長の言いなりになっちゃいますからね」と言う木村の言葉を最後まで聞かず、コードレスの電話をベッドに横たわったままサイドテーブルに戻した。

私はベッドの上で、ばかばかしい記憶を振り払うように大きく一つ深呼吸をした。

とにかく今日、私はオフなのだと自分に納得させるようにうなずき、大きく伸びをしてからゆっくり起き上がった。

ベッドから元気よく立って行ってカーテンを開ける。薄暗かった部屋に一瞬のうちに光が満ち、私は目をしょぼしょぼさせた。

眩しさに霞む目で、窓越しに外の景色を見下ろす。

私の住む十三階建ての公営住宅の、最上階からは小さく見える街路にも児童公園にも人の姿はない。通勤時間を過ぎたこの時刻は、男たちを、子供たちを、勤めを持つ女たちを、そして散歩に出掛ける老人たちを、すべて送り出してしまった後の静けさと倦怠が、安らぎという女性名詞となって支配しているようだ。そんな感慨を持つのも、初めて仕事をさぼったキャリアウーマンの感傷かと思うと、何となく情けない気分になる。

静けさの中で建物に満ちた気配を探っていた耳に、エアコンのノイズだけが規則正しく聞こえて来る。

そのとき、ノイズに混じって微かにヴァイオリンの調べが聴こえた。驚いて耳を澄ますと、私の大好きなバッハの旋律が窓ガラスの向こうから流れて来る。反射的に窓を開けると、むっとする湿った熱気が顔を包んだ。

熱い外気の中でいくらか鮮明になったヴァイオリンの音色は、窓越しに聴いたときより、はるか下の方から響いて来る。窓から身を乗り出すようにして見下ろしてみたが、目に映る歩道にも児童公園にも人影はない。公園の中央に聳えるケヤキの張り出した梢越しに数脚のベンチが見えるが、人の姿までは確認できなかった。

ヴァイオリンの澄んだ音色は風の向きにでもよるのか、幾分聴き取りやすくなったかと思うとまた微かな音量に戻る。曲は私の好きな「無伴奏バイオリンのためのソナタとパルティータ」の第一番。

私は居ても立ってもいられなくなり、階下へ飛び出そうとパジャマを脱いだ。それほどヴァイオリンの調べはすばらしく、私の好奇心を刺激していた。

私は裸のままジーンズに足を突っ込み、素肌の上にTシャツを着て、玄関の隅に転がっていたスニーカーを突っ掛けて部屋を飛び出した。ちょうど待機していたエレベーターに飛び込み一階のボタンを押す。このエレベーターは全く遅い。いらいらしながら足踏みを続け、一階のドアが開くと同時に児童公園へと走る。日ごろの運動不足がたたたり、ケヤキの下に着いたときはもう息切れがしていた。両膝に手を置き、身体を折って息を整えながら注意深く辺りを見回す。全身から噴き出た汗が、私の身体をどこかに押し流してしまいそうだ。

既にヴァイオリンの音色は絶えてしまい、虚ろな目で周囲を見回す私の目には誰一人見えない。

「バッハがお好きなのですか」

背後から唐突に声が聞こえた。熱い大気が静けさと溶け込んだ中で、凜としてよく通るバリトンだった。びっくりして居住まいを正しながら振り返ると、逆光になったケヤキの幹を回って黒いシルエットになった人影が、私の視界に入って来た。

居住まいを正すといっても、ほとんど裸の上に布きれをまとっただけの私に何もすることはなかったが、ただ心構えだけを整えシルエットの男を迎えた。

「素晴らしい音色でしょう。心が洗われるようだ。今日はパルティータが聴きたくて来てみたのですが、ソナタだけでしたね。ちょっと残念でした。それに、気が乗らないと、さっきみたいに途中でやめてしまうのですから。全く困ったもんです」

「あなたは、ヴァイオリンを弾いていた方をご存じなんですか」

「ええ、知っていますよ。素敵な少女が弾いていたんです。可哀想に彼女は精神を病んでいるのですよ。彼女の音楽は向こうの世界から鳴り響いて来る音色なのです。まるで、こちらの世界に住むものを、あちらへと誘っているように聴こえる。誘惑の罠のようなものです。きっとあなたも、そんな悪戯に魅了されて、息を切らせて駆け付けたのではありませんか」

肩で息を切らせながら私は、ゆったりとしたバリトンに凶星を指された感情を、そのまま認める気にはなれなかった。

私は身構えて、黒いシルエットの男にできるだけ低い声で言った。

「貴重な情報を聞かせていただいて大変ありがたいのですが、見ず知らずの私に演奏者のプライベートのことまでお話になるのは、いかがなことかと思います。正直言って、あまり愉快なことではありません」

黒い影になった顔の中で白い歯が覗き、男が声もなく笑ったように見えた。気まずい沈黙があり、私はじっと男に見つめられているように感じられたが、黒い影となった男の目を確かめることができない。

微かに両肩をすくめ、一呼吸おいてから私に背中を向けた男は、ゆっくりと歩み去って行った。

私は、男の視線が張り付いていたように感じられた胸元に視線を落とした。汗に濡れたTシャツから両の乳首がはっきりと透けて見える。私は、むせ返るほどの暑さの中で全身がかっと熱くなり、とたんに反転し、冷たい汗が流れ出るのを感じた。

慌てて木陰を飛び出し、男が去った方向を見たが既に人影もなく、児童公園の外へと延びたアスファルトの街路には、ゆらゆらとした陽炎が立っているだけだった。

あの男は私に、何を伝えたかったのだろうか。

偶然聴き取ったバツハと鋭く反応した私。演奏者とその状態を知り私に告げた男。そして多分、男が見つめていた私の胸。

奇妙なことの続いたこの日の朝、熱い日差しに炙られながら私は、会社をさぼった罰を、熱く冷たい汗に濡れそぼって十分味わっていた。

2 カメラマン

秋の気配を、全身で感じられるようになったころ。

私の勤める広告代理店はタウン誌を発行することになった。思い付きのように始められた企画だが、オーナーの一声で現実のものになってしまったようだ。社運を賭けるといった告示が張り出されたことは覚えていたが、そこは零細企業のいい加減なところで、うまくいかなかったら、いつでもやめてしまえといった意図が見え見えだった。その証拠に、満足なスタッフなど集めてはいない。とりあえず手の空いている者が慣れない仕事を進めているようだった。

その日、私の属するデザイン課にも応援の要請があった。

課長と例の件で気まずい関係になっていた私に、当然のように白羽の矢が当たる。即刻支援に出掛けるようにとの指示が飛んだ。おまけに、全社あげてのプロジェクトだからと言ってありがたくも、アシスタントまで付けてくれた。あのアルバイト学生の木村だ。

ふくれっ面でタウン誌編集室に行くと編集長から、早速取材に出掛けるよう命じられた。

一時間後の午後三時から、駅前のデパートの催事場で開催されるプレスレセプションへ行ってみようと言うのだ。

提携している新聞社から地域情報としてファックスが入ったので、取材しなければならないのだと言うだけで、定年間近の編集長からは詳細の説明もない。

「なんて事だ」と私は思った。

「取材といたって、誰にでもできる仕事ですよ。初仕事なんだから、まあ気楽にやってみてください。でも、くれぐれも時間には遅れないでくださいね」

「なにが気楽にだ」と喧嘩腰になりそうになったが、ちょうど電話のベルが鳴り、氣勢をそがれてしまった。受話器を取りながら顎をしゃくる編集長に舌打ちをし、部屋を出ようとする後ろから声が掛かった。振り返ると、受話器を手で押さえた編集長が中腰になって高い声を出す。

「新聞社は来られなくなったんだってさ。取材は全てこっちに任せると言っている。できれば新聞社の分までやってきてくれよ。カメラを忘れるな。それから、車はないからね」

私は後ろ手にドアをばたんと閉めた。

最悪の滑り出しだった。こんな体制でタウン誌が発行できるものかと思ったが、それは

私が心配することではないと気持ちを落ち着け、苦勞していっばしの取材記者の顔を作る。

デザイン課に寄って木村を連れ社員用の駐車場に向かう。隣を歩く木村は、肩からニコンF4をぶら下げている。社用の借り物とはいえ、いっばしの写真記者を気取っている様子が面白いが、他人のことは言えない。

私の赤いユーノス・ロードスターを元気よくオープンにして乗り込む。木村がもたもたとシートベルトを付けているのを尻目にアクセルを吹かし、急発進する。一瞬、シートに背中が押し付けられる快感がたまらない。

ロードスターはスムーズに駐車場を出て車の流れに乗り、しばらく気持ちよく走ったが、目抜き通りに合流する信号のはるか手前で渋滞に巻き込まれてしまった。信号待ちが四回目になり、いらいらしながらダッシュボードの時計を見つめる私の隣で、木村が呑気なことを言った。

「これから行くデパートの催事場では、何をやっているんですか」

「プレスレセプション」

不機嫌な声で私は答えたが、彼も負けてはいない。

「そうじゃあなくて、なんの催しのご招待かってことなんですよ」

「そんなこと知るわけないでしょう。なんの説明も聞いていないんだから」

言ってしまうから、しまったと思った。アルバイトの木村に会社の内情をぼやいても仕方がない。黙ってしまった木村に媚びるように明るい声を装った。

「デパートで何やってるのか、あなた本当に知らないの。今朝の新聞、読まなかったんだ。新聞記事によると、この市に住む郷土の写真家が、あの有名な土門拳賞を獲ったんだって。その受賞記念作品展示会が明日から始まるのよ。だから多分、今日はオープニングレセプションってとこなんじゃあない」

「へー、そうだったんですか。俺はプロのカメラマンの撮った写真を写しに行くんだ。それじゃあ初めから勝負あったって感じですよね」と間の抜けたことを言う。

やっとのことで渋滞を切り抜け、駅前のデパートに着いたときはもう、定刻の午後三時を三十分近く回っていた。

満車に近い駐車場でまたうろうろした後、疲れ切った気持ちでエレベーターに乗った。初仕事から遅刻では先が思いやられる。

催事場のある七階のドアが開き、廊下の先に展示場のアーチが見えたが、やはりざわめきも緊張感も伝わって来ない。足早に歩いて行っただが、終わってしまったものを元に戻す

ことはできない。

展示会場のアーチをくぐり、会場に一步踏み行った私は素早く周囲を見回した。十数人の男女が、壁面に掲げられた大小の写真やパネルに見入っているだけだった。がっくりと肩を落とした私の視界に正面のパネルが入った。途端に落ちた肩に緊張が走り、目はパネルの上を凝視していた。

私の見つめるパネルには、あの夏の日に見ることの出来なかった情景が鮮やかに写し取られていた。児童公園のケヤキの周りの季節は、夏から秋、秋から冬、そして春へと四季に渡って変わってはいたが、その中央には決まって一人の少女がいた。壮絶なまでに真剣な表情と所作で、悲惨と苦悩、そして無垢の美しさを体現しているかのようにヴァイオリンを操る、まるで天使のような姿があった。

四枚のカラー写真に写し取られた、この世のものとも思われぬ緊張感を持続した天使は、その美しいフォルムから、あの夏の日 of 魅惑的なバッハの音色を漂わせながら、様々な姿態で私に挑み、誘い掛けて来るのだった。

「またお目に掛かれましたね」

私の耳元で突然、パネルの画面から聞こえて来たようにバリトンが響いた。忘れもしない、あの奇妙な夏の日の朝に聞いたバリトンだった。

「その写真の少女ですよ。あの日あなたのお好きなバッハを弾いていたのは。ご覧の通り素敵な少女なんです。あの美しい音楽のなんぶんの一でもいいから近付けたらと思って撮ったんです」

いつの間にか隣に並んだ彼が、囁くようなバリトンで話し掛ける。

耳をくすぐる声音に私は、背中から下半身にかけてむず痒くなった。たまらなく表情が見たくなって、正面のパネルに合わせたままの視線を、そっと彼のほうに向けたが、視界に入ったのは肩先だけだった。

「どうぞ、ゆっくり見ていってください」

私の返事も待たずにそのまま先に歩いて行く彼の後ろ姿を目で追っていると、すり寄ってきた木村が頓狂な声で話し掛けた。

「受賞者と知り合いだったんですか。ツーショットでいいムードでしたよ。でも変なカメラマンみたいですよ。そこの説明板で見たんですけど、あの人はキチガイばかり撮るんですってよ。キジルシ専科なんてジャンル、聞いたことないですよね」

しつこく付きまとってくる木村を邪険に追い払いながら、私は会場を回り彼の作品を熱

心に見た。

会場内の至る所に、極限にまで張りつめた緊張を湛え、無垢の美しさに満ちた天使たちの姿があった。その天使たちは少女であったり少年であったり、男性や女性、また老人であったりした。それぞれが、歌い、演奏し、描き、踊り、舞い、茶を点て、花を活けたりしている。

私は憑かれたように写真を追ひ、作品世界の感動に浸りきったまま、いつしかデパートの玄関を出ていた。

隣にいる木村が何事か話していたが、意味は聞き取れなかった。そのとき、背後から数人の荒々しい足音と懐かしいバリトンが聞こえた。

「君たちに、差別呼ばわりされるいわれはない」

「だって、精神障害者を食い物にしているんでしょうが。あんたは芸術家として恥ずかしくないんですか」

「先生、待ってくださいよ。先生がいなくなっちゃったら、オープニングが減茶苦茶になっちゃいますよ」

興奮した数人の男たちが、私たちの横を足早にすり抜けて行く。三メートルほど行き過ぎてから彼が振り返り、大きな声で言った。

「車があるのなら、乗せてってくれないか」

私に言ったのではないことは十分承知していたが、

「はい。どうぞ乗って行ってください」

私もつい大きな声を上げ、彼の方へ二・三步近付いた。

私の姿を見た彼は、ちょっと怪訝そうな表情を浮かべたが、すぐ頷いて私と並んで駐車場へと急いだ。

私のロードスターに二人が乗り込んだとき、後を追ってきた木村がやっと追い付き「俺は、どこに乗るんですか」と情けない声を出す。

「この車は二人乗りなんだから仕方ないじゃないの。バスかタクシーで帰ってくれる」

冷たく言って、速い加速でロードスターを発進させた。バックミラーに映る木村の恨めしそうな顔に片目をつむり、駐車場を後にする。目抜き通りの車の流れに強引に割り込み、ギアをトップに入れると「ご迷惑をお掛けします」と、静かなバリトンで彼が言った。

「いえ、とんでもありません。かえって私が勘違いしたのかもしれませんが」

「いや、遠くに知人が見えたので声を掛けたのですが、あなたに返事をして貰ったときは、

正直言ってうれしかったですよ。よろしかったら山地の方へ向かってください」

「ええ」と答えて、私はアクセルを踏む右足に力を加えた。

山地へ向かうのは久しぶりのことだった。山地はこの市自慢の地域で、市街地を抜けてしばらく北へ走れば、溪谷沿いに美しい風景が続くはずだった。古くから林業で栄えた地域だったが、今は市街に通う高級サラリーマンのための住宅地区に変わっていた。恐らく彼も、そんな階層に属する一人なのだろうと私は思った。

走り初めて二十分ほどで、車は溪谷沿いのよく整備された道路に出た。しばらく上って行くと切り立った山がとぎれ、ほっとため息を付きたくなるような小さな盆地に出る。道路沿いに潇洒な住宅が続き、途切れたところで「曲がってください」と言う彼の声で左折した。

私道と思われる一車線の道が二百メートルほど続いた後、フロントガラスいっぱいになるほど大きな長屋門が私たちを迎えた。門をくぐり、テニスコートが三面は取れそうなほど広い庭の隅に、いじましくロードスターを止める。

「遠慮しなくていいのですよ。何しろ古いだけが取り柄の家なんですから。何でも二・三百年前に建てられたと言われています。古いものが好きだったらよく見ていってください」

屋敷のたたずまいに気圧された私の気持ちを見透かすように彼が言った。いつも人を連れて来る度に、彼は同じことを言うのだろうか。私は少し不快な気持ちになり、黙ったままエンジンを切った。

「さあ、ちょっと寄ってお茶でも飲んでいってください。とんだご迷惑をお掛けしてしまって、本当にすいませんでしたね」

彼に不似合いと思われる下世話な口調で言って、気まづくなった場を取り持つように車から降りて私を待つ。何か一言、言ってやろうと思ったが、多分、ひとあし早くエンジンを切ってしまった私の負けだ。運転席の方に回り込んで来た彼に促されるように、私は車から降りた。

もうあたりは薄暗くなっていて、彼と並んで立った庭の正面に、茅葺き屋根の巨大な屋敷構えが、まだ明るい西の空をバックに黒々とした姿で私を脅迫していた。

「あれが母屋なんですけど、今は私のスタジオになっています。少し離れたところに死んだ父が建てた文化住宅があって、家族はそこに住んでいるんです。まあ、私一人しか居ないところですが、心配しないで、ぜひ寄ってってください」

日が落ちて暗くなった庭を彼と二人、母屋へと向かって歩いて行く。少女漫画のようにロマンチックなシーンなのだが、三百年の伝統が私を重く包み込んでしまう。彼の一方的な話を聞きながら、私たちは母屋へと向かう長いアプローチを歩いた。

母屋へ三メートルほどの距離まで近付いたとき、突然、黒々とした屋敷のシルエットに明かりが射した。びっくりした私は、思わず彼の腕を握ってしまった。ちょうど玄関に当たると思われる部分で引き戸が開けられ、屋内の明かりがほのかに外を照らし出した。その明かりを背にして和服姿の女性が、何かを捧げ持つような格好で黒い影となって現れた。私たちに向かって来る女性が捧げるように持っているのは白磁の花器だった。鮮やかな深紅のバラが十数本、無造作に投げ込まれている。端然とした顔立ちの女性は、すれ違いざま「こんばんわ」と声を掛けた。

「こんばんわ」と、彼が挨拶を返す。隣近所の知人同士が交わす、ごくさりげない挨拶のようだったが、私は何となく違和感を感じ、すれ違った和服姿の女性を振り返った。瞬間、私の記憶に、静謐な空気に溶け込むようにして花を生けていた女性の姿が甦った。あれはつい数時間前のことだ。あのデパートの催事場のパネルの上に彼女はいた。楚々とした着物の袖から白い二の腕が覗き、指先でしっかりと支えた豪華な牡丹に落とした視線はまるで、永遠を見つめているようだった。そのモノクロームの写真は大小五枚で組まれ、会場の一翼を飾っていたのだ。

隣にいる彼の横顔を、覗き込むようにして見上げた。

「気が付きましたか。私の妻なんですよ。可哀想な女です。花を活けているときだけ、情熱を燃やすことができるんです。それ以外の時はじっと、自分自身の世界に閉じこもったままで、私できえ受け入れてくれません」

私は、何も言うことができなかった。ただ、彼の写真が、先ほど何者かに非難されたように、精神障害者を食い物にしているのではないことだけは、完璧に理解できた。

彼に促されて私は、母屋に足を踏み入れた。入ったところは広い土間で、思ったよりずいぶん明るい。堅く踏みならされた土の感触が靴底を通して感じられた。左手に座敷がある。座敷といっても檜材の寄せ木で組んだフローリングになっている。広さは、小学校の教室ほどもあるのではないかと思われた。この広間はずかしくて、襖で四つに仕切られていたのかもしれない。中央と土間側に二本、一抱えもありそうな柱が通っている。上を見回しても天井はない。暗がりの中に漆黒の梁が重々しく、複雑に横切っているだけだ。

「さあ、上がってください。今、お茶を持って来ますから」

彼の言葉で我に返り、私は巨大な石の靴脱ぎ台から広間へと上がった。

広間には、ほとんどなにも置いてなかった。ほぼ中央の衝立の影に、灰色をした革張りの応接セットがあるだけだ。勧められるままに私はソファーに腰を下ろした。

お茶を入れに行くと言って奥のドアに消えた彼を幸いに、周囲を好奇の目で見回す。しかしなにもない、カメラマンのスタジオから連想されるような機材もほとんどない。それらしく感じられるものと言ったら僅かに、私の座ったソファーの横に開いたジッツオの三脚、載せられたハッセルブラッドの六・六判カメラ、レンズはツァイス製のプラナー110ミリF2。それから、部屋の隅に大きなアンブレラを付けた照明機器が三基。これだけだった。まあ、照明機材の横に、よく使い込んで傷んだアルミ製の機材入れが三個転がっていたが、なんとも頼りないスタジオに見えた。もちろん、写真の質は機材の量で決まる訳じゃあないと、私は妙に感じ入って一人で納得した。

「お待たせしました」と彼が言って、奥のドアを開けて銀のトレーに載った飲み物を運んで来た。広い部屋の中にコーヒーの香りが広がる。目の前の大きなガラスの卓に置かれたカップはロイヤルコペンハーゲンだ。そっと一口付けたコーヒーはなんと、インスタントだった。思わず私は、にっこり笑ってしまった。

「今日は、本当にご迷惑をお掛けしました。でも、ありがとう」

彼が、改まった口調のバリトンで言う。

「いいえ、私の好きにしたことですから。でも、興奮している声を聞いたときは、びっくりしてしまいましたわ」

「恥ずかしいところをお見せしてしまった。あんな事で腹を立てるなんて、まだまだ打ち込み方が足りないんでしょうね」

「どんな人たちだったんですか」

「精神障害者の支援団体に属する者だと言っていましたね。私が精神障害者のプライバシーを写真に撮って公表し、食べ物にしているから抗議に来たと言っていました。あんな賞なんて辞退すればよかったんです。それを、少しでも多くの人に友人たちの素晴らしい世界を見て貰いたいなんて思って。失敗でしたよ。甘いことを考えてしまったようです」

「いえ、素晴らしい展示会だと私は思いました。ごく一部の、心ない人たちに理解されないといって、私たちにまで見る機会を与えないというのは、残念なことだと思います」

「もういいのですよ。済んだことですから。あなたに分かっていただきたいことは、あの写真に写っているのはみんな私の友人なんだということです。私は、友人たちの住む真摯

な世界に憧れ、少しでも近付こうとしてシャッターを切るだけなんです。でも私自身にいつも裏切られ続けて来ました。彼らの世界へ近付くどころか、ますます遠ざかって行くのを感じますね。写真なんて虚しいもんですよ」

「難しく考えるのが、好きなんです」

不用意に私が言うと彼は、じっと私の目を見て片目をつむった。一瞬、頬が赤らむのを感じ、目を伏せてテーブルの上のコーヒーカップに、意味のない視線を落としてしまった。

しばらくの間、沈黙が流れた後、彼が立ち上がった。

「お願いがあるんですが。ぜひ、あなたの写真を撮らせてください」

突然かすれた声で言った彼は、返事も待たずに背を向け、部屋の隅のアルミの機材入れからライカM4を持って戻って来る。レンズはズミルックスの50ミリだ。

「時間は掛けませんから」と言って、アンブレラの付いた照明器を一灯運んで来てスイッチを入れた。

白く眩しい光線が私の目から視力を奪い、ライトの影から連続してシャッターの音が響いた。

ひとしきりシャッターの音を響かせてから彼が、ライトの影から出て来た。

「凄く良かったですよ。時間がないのが本当に残念だ。ねえ、明日は祝日ですよ。ぜひ明日も来てください。久しぶりに創作意欲がわいてきましたよ」

嘘のような賛辞に面食らいながらも私は、訴え掛ける情熱的なバリトンもいいものだと思ひ、何が良かったのかを尋ねるのも忘れ、月並みな質問をしてしまった。

「明日は、展示会の初日じゃあないんですか」

「あんなものはいいんです。絶対に来てくださいね」

彼の返事に絶句したまま、あたふたと家路についた私は、何か忘れ物をしたような心残りを、あの古い屋敷に置いてきたようだった。

それは、展示会で見た彼の被写体と比べ、似つかわしい物とてない私をモデルにしたいという、彼の下心であったかもしれない。

多分、彼のスタジオにいた間に、何かが音も立てずにはじけたのだ。何がはじけたのか記憶をさかのぼっても分からなかったが、確かに二人の間で、彼のバリトンを中心にして何かがはじけたのだ。それは予感ではなく、もう始まっていることなのだと私には理解できた。

溪谷沿いの道が流れるようにハンドルを切りながら私は、妙に浮き浮きしてくる気持ち

と、明日の取材を断る口実探しの嫌悪感に分裂した感情を、十二分に楽しんでいた。

3 プリマ誕生

祝日の朝、午前九時に目覚めた私は、ベッドの中から会社へ電話を入れた。思っていたように、先に出社して待っていたらしい木村が電話口に出た。

「えっ病気、本当ですか。困ったなあ。俺一人で取材に行くんですか。困ったなあ」

困ったなあ、を連発する木村は、少しも困ってはいない声で「お大事に」と言って電話を切った。

何が本当ですかだ。動物園の猿山の取材なんて、木村が彼女でも連れて出掛けて行けばいいのだ。

すがすがしい朝を汚す木村に、たまらなく腹が立った。

なんと言ったって私は今日、プロのカメラマンのモデルになるんだ。木村ごときに構っている余裕はない。

取材を木村に任せきれて気が楽になり、いくらか誇らしい気分でそれぞれと身繕いをしてから、オープンにしたロードスターに乗り込む。真っ青に澄んだ秋空が私の心を弾ませ、アクセルを踏む足に力がこもる。休日で道が空いていたせいか、思いの外早く彼の家に着いた。

今日は、庭の中央に聳える大きな木犀の下に車を止めた。朝の光の中で見る築三百年の屋敷は、さすがにくたびれて見えるが、威風堂々とした威圧感、当時の分限者の権勢と矜持を十分に忍ばせてくれる。横手に連なる疎林越しに、彼が文化住宅と呼んでいた建物らしいものが見える。その住宅はなんと、コンクリート造りで、ちょっとした集会所ほどの大きさだった。資産家の考えることは庶民にはよく分からないな、と思いながら玄関先に立った。

「こんにちは」と、大きな声を掛けるがなんの反応もない。大きすぎる家も不便なものだと独り言を言って引き戸を開き、土間に入った。屋内はほどよく照明されていて、明るい戸外の光に慣れた私の目にも特に障害はなかった。

彼はソファに掛けていたが、私の姿を認めるとバネ仕掛けの人形みたいに飛び出して来た。服装は、タンのチノパンツにグリーンのコットンシャツ、ベルトは茶でソックスは白だった。シャツを肘までまくった右手首の、IWCのリストウォッチが眩しい。

今日の私はシンプルに、アイボリーのシルクニットのワンピース姿だったが、昨日のパ

ンツルックよりは、よほどシックに見えることを祈った。

「待っていましたよ、来てくれないかと心配していたんです。さあ、早く上がってください」と急き立てるように促す。

私は昨日と同じソファーに座り、さりげなく辺りを見回した。昨日と比べ特に変わったことはないが、よく晴れた朝なのに、どこからも外の光が入って来ない。恐らく周囲に巡らしてあるクリーム色のカーテンの外は、パネル材のようなもので固めてあるに違いなかった。

「すぐ始めましょうね」

彼はどこか落ち着かない様子でライカM4を取り上げた。今日は、コーヒーは出ないようだ。

ソファーの周りに二基の照明器が用意され、私の正面のほか斜め後方の高いところからも白い光線が浴びせられる。

「レムブラント光線で撮りますからね」

正面のライトの影から、彼の声とライカの静かなシャッター音が聞こえた。私はどんな格好をして、どんな表情をすればいいのか。彼からは、なんの指示もない。シャッターの音を聞きながら少し不安になる。だって今日、私はモデルなんだから。

私の顔に不安そうな影が射したのを見透かしたように、ライトの影から出て来た彼が、前の椅子にどっかりと座った。

彼は喘ぐように肩を上下させ、私を通り越した先を見るような目をしてしばらく、うーうーと声にならないうめき声を上げていた。私は心配になって顔を覗き込んだ。

「お願いだから、脱いでくれないか」

覗き込んだ私の目を、じっと見据えるようにして彼が言った。

「えっ」と言って絶句している私に、真剣な表情で畳み掛ける。

「脱いでください。あなたの美しい身体をレンズの中に入れてしまいたい、お願いします」

多分私は、こうなることを初めから予期していたのかもしれない。

私は、彼が被写体にして来た友人たちのような美しい世界を持っていないのだから、私自身の身体を彼に提供するしかないのかもしれない。不思議なことに私は、ほとんど驚かずに彼の言葉を聞き、そして頷いていた。

私は応接セットの衝立の影で、ワンピースを脱いだ。

背中に両手を回しブラジャーを外す。そのまま両の乳房に手を当て息を整えていると、

いつの間にか後ろへ回っていた彼が、そっと肩に両手を置いた。瞬間、背筋の中を熱いものが走り、鳥肌だったうなじに彼の唇が触れた。反射的に振り返り、彼の胸にすがるようにして顔を埋めた。

背中に回された彼の両腕に力がこもり、抱きすくめられた私の唇に彼の唇が合わせられた。彼は強く口を吸った後、舌を入れて来た。二人の口の中で、彼の舌と私の舌が蛇のようにもつれ合う。裸になることで構えていた全身の力が急に抜けてしまっていた。

口を吸っていた彼の唇が離れ、首筋から胸へと身体を沈めながら移動する。背中に回した両手も私の肌を撫でながら下がり、腰のところで左右からショーツを掴み、一気に足元に引き下ろした。

「うっ」と私は声にならぬ叫びを上げたが、前にかがみ込んだ彼の舌が陰部に入ってきたため、快感の声に聞こえたかもしれない。

私は腰の力が抜けてしまい、なよなよと床へくずおれてしまった。

床に座り込んだ私の肩に手を当て、体重を乗せるようにして押し倒した彼が両手を軽く握った。呆然として素直に差し出した両手を、彼は凄い力で背中へとねじ曲げ、ざらざらとした感触の縄のようなもので素早く後ろ手に括り合わせてしまった。

「はっ」として我に返ったが、私には未だ、この状況がほとんど理解できなかった。首を回して彼の姿を探すが、床に伏せた私の横で右手に縄を持って立っている彼の姿は、最前までとはまるで別人のようだ。確かに、一瞬のうちにすべてが変わったことだけは理解できた。

そのとき彼が、右手に持った黒い麻縄を強くたぐり寄せた。

後ろ手に縛られた両腕と肩に激しい痛みが襲った。縄尻を引かれるまま私は、よろよろと上半身を起こし、突然襲い掛かった痛みを怯え、ただうなだれるばかりだった。

私の頭脳の冷静な部分が、このままでは観念したと思われるだけだと告げる。ここで抵抗しなければと、焦る気持ちはつもののだが、どうしても身体が付いて行かない。足元を見ると両膝は離れ、あられもない格好で座り込んでいた。

彼は、そんな私の様子に安心したのか、得意そうなバリトンで言った。

「びっくりしたでしょうね。理不尽な事とも思うでしょうが、あなたの美しさを引き出すためには、仕方がないことなんです。無防備な姿で、諦めきった様子で、そうして蹲っている裸身は想像していた以上に美しい。まるで私の友人たちを見ているようだ」

「やめてください。私はあなたに、こんな乱暴をされる理由はありません」

無意味なことを言ったと思ったが彼は小首を傾げ、私の言葉を反芻しているような仕草を見せた。

「乱暴。心外なことを言いますね。あなたの美しさを引き出すことが、そんなに嫌われなければいけないことなのですか。もっと喜んでくれてもよいのに」

「喜ぶですって。馬鹿なことは言わないで早く縄を解いてください。痛くてしょうがないんですから、絶対に暴力ですよ」

「暴力。暴力がお嫌いですか。肉体に加えられる暴力など、なんの意味があるのです。痛みなど、ただの瞬間にすぎないではありませんか。永遠に続く精神の痛みと比べれば、肉体の痛みなど畢竟、心地よいものです。今日は、あなたの美しさを引き出すために、肉体の苦しさを十分に味あわせてやりたい。まず、衣装が大切ですから、きれいに縛り直してあげますよ」

縄尻を強く引かれて私は「ひー」と叫び声を上げた。

叫びを意に返さず彼は、きりきりと縄を引き絞る。縛られた両腕が不自然に引き上げられる激痛に負け、私は意に反しよろよろと立ち上がらざるを得ない。渋々立ち上がった私の肩をつかみ、彼は「正座しなさい」と、きっぱりとした声で命じた。

仕方なく私は、犬のように言いなりになり、全裸のまま膝を折って正座した。彼は、後ろ手に縛った縄尻を持ったまま背後へと回る。

「思った通り、あなたは柔らかい身体をしていますね」と言いながら、背中で交差させた両手首を、さらに高く持ち上げようと縄を上へ引き絞る。両腕が首筋の近くへ来るまで引き絞った二条の縄を二つに分けて首に回し、きりきりと結び目を作った後、左右に分けた縄で両の乳房を菱形に囲むように縄掛けをしていく。

「これが菱縄縛りというんですよ」と、彼がうれしそうな声で命名した。

彼の言う通り、うつむいた私の目に、両の乳房を中心にした二つの縄の菱形が見えた。もう上半身は身動き一つできないくらいに緊縛されてしまった。細いうエストにも縄が二巻きし、お臍の下で結び目を作られている。

「足を開きなさい」

言われるままに少し両足を開くと、お臍の下の結び目から延びた二本の縄が足の間をくぐり、お尻の割れ目に沿ってギュッと引き上げられた。

「きゃっ」とかん高い悲鳴を再び上げたが、彼は意に介さず「痛いかもしれませんが、縄の間に入れますからね」と言って性器を二本の縄の間に挟み、身体を縦に割るようにして

縄を背中へと引き絞り、ウエストを巻いた縄に結び付けた。私の性器は二本の麻縄に厳しく挟み込まれてしまい、激しい驚愕と痛苦が電流のように身体を中心を突っ走った。

「歩いてごらん」と彼はさりげなく言って、背中を乱暴に突いた。

反射的にたたらを踏み、二・三步よろめいた私の性器が激しく縄で擦れた。針の先で引っ搔かれたような鋭い痛みで声にならぬ叫びを上げ、再び屈み込もうとしたが瞬間、屈めた身体でひきつった縄が性器と肛門に擦れて食い込み、全身がカッと熱くなるような苦痛と屈辱が襲った。進退窮まった私は、きつく歯を噛みしめてこの苦痛と屈辱に耐え、ただ悄然と直立しているばかりだった。

「ああ、本当に美しい。これが美の極致ですよ。あなたも自分の美しさを見なければいけません」

独り言のように彼は言って、部屋の隅に用意していた大きな姿見を私の前に運んで来た。彼に無理矢理見せられた鏡に映った私の顔は、少し青ざめていた。

まず、顔に目が行ったことに私は満足した。こんな異常な状況の中でも未だ、精神は正常に働いているらしかった。

しかし、青ざめた顔以外は実に悲惨な状態だった。首から下は幾何学模様になった黒い麻縄が素肌を嚴重に戒めている。ちょっと大きすぎると思っていた乳房は、さらに大きさを強調して菱形に縛られ、縄目の外に飛び出している。ウエストにも二巻き縄が巻かれ、中央に作った結び目から股へと延びた二条の縄が陰毛に分け入り、性器を挟んで尻の割れ目へと這い上がっている。黒い縄目の間から、ピンク色の性器が唐突に飛び出しているのが他人事のようにユーモラスだ。

「後ろも見なさい」

肩をこずかれて私は、見返り美人のように振り返って私の裸を見る。両腕は背中に不自然なほど高く持ち上げられ、手首と二の腕がきつく黒縄で縛られている。手首を縛った縄は首に回されて乳房を縛った菱縄へと続いている。股間から引き上げられている二条の縄は尻の間を深く割って這い上がり、ウエストを締めた縄に結ばれていた。正面に比べればシンプルな構図だと頭の中でうそぶき、陰惨な黒縄で割られた形のよい自慢のお尻を愛おしむように見つめた。

大丈夫だ。こんな状態でも私は十分に綺麗だと思った途端。

「きゃー」

今日四度目の悲鳴が私の口を突いた。鏡の中の、きゅっと締まった自慢のお尻に赤い筋

が走った。

「きゃっ」と、また叫んだときには、彼が尻に打ち下ろす一メートルの竹の物差しが見えた。また一筋、白い尻が赤く染まり、身震いしたお陰で黒縄に挟まれた性器に激痛が走った。

何十回叩かれたのだろうか。数え切れないほど「きゃっ」と言う悲鳴を上げ裸身をくねらせてもだえ苦しんだ後、私は失禁し床に崩れ落ちた。

微かなアンモニア臭が鼻を突き、こらえきれない下半身の痛みとともに、初めて恥ずかしさがこみ上げ、耳の先まで赤く染まるのが自分で分かった。

「うーうー」と唸る彼の声が、混乱した私にも異常に耳に付いた。ひとしきり感に堪えたような唸り声が続いた後、しばしの沈黙があり、彼が屈み込む気配がした。

彼は、私のウエストの後ろにある縄の結び目をほどき、股間を縛った縄を解放した。

床に延びた私の身体に覆い被さった彼は、両足を押し広げ尿にまみれた陰部に口を付け、ペロペロと舌で舐め続けた。彼が呼吸する度に「美しい、美しい」と言う声が、かろうじて残った私の理性の耳に聞こえた。

彼の舌で、彼にとって清浄にされた私は、強く縄尻を引く彼の力で荒々しく上半身を引き立てられ、再び床に座らせられた。

性器を厳しく挟んでいた縦縄が解かれたお陰で、股間を襲う激痛はなかったが、竹の物差しで無数に打たれたお尻全体が鈍く、火傷の後のようにヒリヒリと痛んだ。

「あなたの肉体の反応はすばらしい。美しさだけではなく、私を遠い世界へと誘ってくれる。もう少し、もう少ししたら。私は向こうの世界に飛び立てるかもしれない」

もちろん私の肉体はすばらしいに決まっているし、あたら疎かにはしてこなかったつもりだ。しかし、向こうの世界とか、飛び立つとかと言った、彼の狂おしいバリトンは少しも理解できる論理を持ってはいなかった。

身をすくませるようにうなだれて座った私を、何か思案に耽るように見下ろしていた彼は突然、震える両手で肩をつかみ、しゃがみ込んだ。悄然として俯いている私の顔が気に入らないのか、顎に手を掛けて仰向かせ「目を開きなさい」と命じる。わざと薄く開けた目を覗き込み「まだ、まだまだ、だね」と恐ろしい声で言った彼は、素早い動作で床にそろえて投げ出していた両足首をつかんだ。

強い力で足を開かせ、両手で持った足首を交差させて重ね、あぐらを組ませる。新たに取り出した黒い麻縄で、あぐらに組んだ両足首を厳しく縛る。私は陰部を剥き出しにした

恥ずかしい姿に緊縛されてしまった。

縛り終わって立ち上がった彼は、大きく息を吸い込み「えい」と声を掛けてから屈み込んで、あぐらを組んだ私の太股に両手を差し込み、四十五キログラムの裸体を抱え上げた。ちょっとふらつきながらも彼は、私を抱えたまま十歩ほど歩き、素足のまま土間へ降りた。

幅二十センチメートルほどの柱の前まで進み、柱に向き合わせて私を土の上に降ろす。あぐら縛りにされた裸のお尻と陰部に、冷たい土の感触が残酷に感じられた。彼は柱を向いて座らせた肩に手を掛けて、私を仰向けに引き倒した。上がった両足を閉じようと必死にもがく私にお構いなく、腰のところを持って柱へと押し付け、えいっとばかりに腰と尻を柱に持たせ掛けたまま押し上げる。

私はあぐらを組まされたまま逆立ちにさせられ、性器と肛門を天井に向けた格好で、柱に緊縛されてしまったのだ。

「この黒い陰毛が卑猥なんだよね。やはり、きれいにしなければ、どんなに望んでいても、私の友人たちの仲間入りはできないかもしれませんよ」

決して私が望んだこともない希望を彼は勝手に作り、踊るようにして部屋を出ていった後、大きな紙袋を下げて戻って来た。

その間少しの時間だったが、私は、さんざん打たれて赤く腫れ上がったお尻を宙に晒し、時とともに動く部屋の空気を、私に残された日常感として、思い切り開かされた性器で感じていた。もちろん、生まれて初めての体験だったことは間違いない。

彼は紙袋からはさみを出し、私の顔を跨いで屈み込んだ。

ジョキ、ジョキという音がして、切り取られた陰毛が私の腹や乳房の上に舞い落ちて来る。

「さあ、だいぶきれいになったから、仕上げをしまおうね」

彼は楽しそうなバリトンで言って、陰部全体にシェービングスプレーを振り掛け、ジレットの剃刀で残った陰毛を剃り始めた。

「あなたのお尻は、けっこう毛深いんですね」

言葉とともに肛門の周囲で、ジレットがジョリ、ジョリと音を立てる。私は、これ以上恥ずかしいことはないという体験を続けたにも関わらず、また耳朶まで赤くなってしまった。

陰毛を剃り終えた彼は、ひとしきり満足したように私の恥丘を両手で撫で、性器に舌を這わせていたが「やはり不十分のようですね」と、低く呟いた。

彼に性器を舐められる刺激に、キチガイじみた状況の中でも全てを受容し、聞き直って陶然とした快感を味わおうかと思っていた私も、彼の呟きに啞然として目を見開いた。

何が不十分だ。何がもう少しだ。私はキチガイの慰み者ではない。

そう思った瞬間、昨日展示場で見た、ヴァイオリンを弾く少女の写真が私の脳裏に甦った。そう言うことなのか。そう言うことだったのかと、なんだか分からないなりに私は、何事かを理解したように思ったのだがー。彼の始めた行為は余りにも意表を突くものだったので、私の思考は情けなく中絶してしまった。

彼がジレットに代えて紙袋から取り出したのは、大きなガラスの注射器だった。びっくりして目を見張る私の眼前で、なぶるようにちらつかせたその注射器にはしかし、針は付いていない。

「びっくりしたようですね。でも、私は医者ではないもの。注射なんてしませんよ。これは浣腸器。あなたのきれいになったお尻に使って、今度は、あなたのお腹の中をきれいにしてあげたいんですよ」

そう言って彼は薬瓶を取り出し、巨大な浣腸器に薬液を、おもむろに吸い込ませた。

「さあ、いくよ」と言って浣腸器を右手に掲げ、左手の指で身動きできぬまま宙に突き出されている肛門を大きく割り開き、太いガラスの嘴口を挿入する。彼がゆっくり浣腸器のピストンを押すにつれ、冷たい薬液が肛門から直腸へと滲入して来るのが分かる。「たった二百CCだよ」と彼は言ったが、なんと牛乳瓶一本分の量だ。下腹部はもう既に、ゴロゴロという音を私に伝える。肛門がこそばゆく、きゅっと括約筋を締めていても、突き刺された嘴口の間からうんちが漏れそうになってしまう。

薬液を注入し終わり、浣腸器を引き抜いた彼は、代わりに自分の右手の親指を肛門に突き立てた。肛門が引き裂かれるような激痛と、下腹部でゴロゴロとする鈍い痛みで、私はもう気も狂わんばかりだ。

「いい表情ですよ。本当に美しい。栓をしてあげましょうね」と言った彼が、苦痛に呻吟する私の目の前で見せたのは、リキュールのミニチュア瓶だ。先が細く胴の部分でくびれているが、一番太いところの直径は三センチはありそうだ。この瓶を突き立てられるのかと思うと目の前が一瞬、真っ暗になった。

予期していた激痛は襲っては来なかった。しかし、肛門から親指を引き抜く代わりに、グリグリと徐々に肛門を押し広げて暴力的に挿入される太いミニチュア瓶は、長くずきずきと痛む、永遠に続くかと思われる屈辱的な痛苦を私の全人格に与えた。

脂汗を流す私を、立ち上がってじっと見下ろしている彼は、みだらな興奮に全身を震わせ「素敵だ、素敵だ」と、繰り返しかん高いファルセットで独り言を言っている。

何が素敵なものか。素っ裸で後ろ手に縛られ、逆立ちのあぐら縛りのまま浣腸をされた後、でっかい栓を肛門にはめ込まれ、脂汗を流して呻吟している身になってみるがいい。この私の姿が、彼の撮り続けてきた芸術とどこで交差するのか、本当に私は、問い糺したいと思ったのだ。

しかし、下腹部の鈍い痛みが、引き裂かれそうな肛門の痛みを上回ったとき、下腹部に加わる圧力が肛門栓の力を越えた。

スポッと栓が飛び出す音は聞かなかったが、キリキリと張りつめた緊張の糸がぷつぷつと切れた虚脱感の中で私は、肛門からあふれ出る排泄物の臭いではなく、屋外から微かに漂ってくる木犀の香りを、確かに嗅いだと思ったのだ。

失神した私が正気に戻ったのは、広く明るい浴室の中だった。室全体が新しい檜材でできていて、檜の香りが白い湯気に濃厚に混じり、むせ返るようだ。

私を戒めていた黒い麻縄は全て解かれ、横たわった身体に残る擦れた縄の痕を、彼が優しく撫でさすっていた。初めて私に見せた裸身を優雅に動かして、彼は長い時間、私の疲れ切った身体をさすり、舌を這わせた。

温泉場ほどもあろうかと思われる広い湯舟に二人、ゆったりと浸かった後、私は彼に抱かれた。

寝室の広いベッドで二時間ほど微睡んだ後、私は帰路に就いた。

もう暗くなった路面を、ロードスターのヘッドライトが舐める。ドライビングポジションを正そうとアクセルを緩め、腰をずらした途端に、お尻がシートに擦れる痛みと、肛門の裂傷が訴える激痛が私に襲い掛かった。

その痛みの中で、別れ際の彼の言葉が甦った。

「素敵でしたよ。最高です。でも、もう少しですね。ぜひ明日も来てください」

そのとき私は、彼の目をじっと見つめながら、はっきりと首を縦に振ったのだった。

そう、もう少しなのだから。

4 ヴァイオリン

秋も深まった祝日、私はまた午前九時に起きた。

彼の家を毎日通うようになって、もう一か月になる。

昨日会社から、私を解雇するとの書留が届いた。そういえば、彼に夜毎責められた疲れで、出勤する日も不規則になっていたようだ。

何日か前、ボーとした呆けた顔で入社したとき、あの木村に言われたことを思い出した。「ねえ、あんたはパートタイムじゃないでしょ。いくら有給休暇がたまっているからと言って、バイトに迷惑を掛けるよじゃもう、終いなんじゃない」

私は、へらへらと笑って「そうか、あんたが私の代わりになった方がいいかもしれないね」と応えたが、確かに木村の言うとおりであった。

有給休暇をかさに会社をさぼり続けるのは、確かにもう限界を超えていた。木村がワープロで打ったに違いない、文字で埋まった赤い社判の押された用箋を眺め、私は幾分ほっとした気持ちになった。もう会社のことは気にせず、一心に彼とのゲームを深めることができる。そう思うと今日、鮮やかなブルーに澄み渡った空は、私の危険な心の持ちようを表しているみたいだった。

私は、十三階の窓ガラス越しに見える澄み切った空に全身を晒してみたくなり、力一杯窓を開けた。冷たい外気が私の全身を包み込み、耳の奥でキュッと音がした。

ヴァイオリンの調べが、しばらくぶりに耳に入って来たのだ。

あの夏の日の朝と同じバッハの無伴奏ソナタの一番だったが、今朝はパルティータを弾いている。彼が聴きたかったと言っていたパルティータが、秋の澄んだ大気を渡って清冽に私の耳に届く。既に、奏者が何者なのかを知っている今、あの日のように慌てて外に飛び出す必要もなく、私の目から一筋涙がこぼれた。

彼にまつわる人の奏でる調べが私に、この一か月の異常な日々を思い起こさせる。初めて彼に全裸に剥かれ、後ろ手に縛られ、鞭で尻を打たれ、肛門を苛まれた後、総檜造りの浴室で抱かれてからもう、一か月が経っていたのだ。

その間私は、多くの異常過ぎる出来事を体験してきた。

私は彼の妻の目にさえ、恥ずかしい姿を晒したのだ。

それが朝であったか、昼であったか、夜であったのか私はよく覚えていない。どうして彼の妻と一緒に羽目になってしまったのかも、ほとんど分かってはいない。全て彼が仕組んだことで、一切が彼の思惑の中にあったことだったから、ただのキャストに過ぎない私にも彼の妻にも、事の経過以外は知る術がなかったのだ。

私は、いつものように素っ裸だった。黒い麻縄で後ろ手に縛られ、床の間に置かれていた。板敷きの床から一段高くなった床の間は畳二帖分ほどの広さがあった。その床の間の端に私は、両足を限界まで広く開き、逆立ちさせられていた。私の体重を支えているのは天井の梁に渡した黒い麻縄できつく縛られた両足首と、床に押しつけられた腕と、押し曲げられた首だった。

逆さ吊りにされた顔の横には大きな青磁の花瓶があり、白い大輪の菊が十数本、無造作に投げ入れられていた。

頭に血が降りて来る苦しさに耐え、目を堅く瞑っていた私の耳に、ドアを開く音と微かな衣擦れの音が聞こえた。

夜毎彼が、前菜を摂るように竹の物差しや皮鞭で打つお尻は、ミミズ腫れの後が癒える間もなく、青黒い痣が日毎つのっていた。私はその傷だらけの尻を今、高く、性器と肛門とともにあらわに晒して、逆立ちの姿勢のまま緊縛されているのだ。

もうそれほど肉体の痛みは感じず、異常な中の異常な彼の優しさに慣れきってしまいそうになっていた私は、聞き慣れない衣擦れの主を見ようと、放心しきっていた意識に活を入れ不用意に大きく目を見開いた。

目を開いたときにはもう、衣擦れの主は私の斜め前に端座していた。逆さ吊りになった私の見上げる目に映ったのは、初めてこの古い家を訪れたときに庭ですれ違った和服の女性だった。

彼の妻は桐生お召しに名古屋帯をきりっと締め、私の存在など露ほども気にせぬ風情で、青磁の花器から白い菊の一輪を、さりげなく手に取った。

流れるような所作で私の頭の前までにじり寄った彼女は、捧げ持った菊を一閃して、剥き出しになったお尻の上で垂直に止めた。なんの前触れもなく、また痛みもなく、研ぎ澄まされた刃で切られた菊の茎がすっと、肛門深く差し込まれた。視界から外れた上の方で、私の呼吸に連れて蠢く大輪の白い菊が、場違いな肛門の花器で揺れているのがはっきり見えるような気がした。

「お見事です」

いつの間に来たのか、私を逆さ吊りに縛り付けたまま、長い時間放置していた彼が現れ、妻をねぎらっている。

何がお見事なものかと私は思った。私の肛門に生けられた花がそんなに見事なものなのか。見事だと言え、この状況に黙って耐えている私の人格の方が、どれほど見事なことかを知るがいいのだ。しかし、私は黙っているしかなかった。全裸で逆立ちに縛られた私の口には、唇を割って二本の黒い麻縄できつく、猿轡が噛まされていたのだから。

「ありがとうございました」と彼が言うと、妻は恭しく一礼して再び、衣擦れの音も涼しくドアを開けて去って行った。私の存在にも、ましては人格にも一切、なんの注意も払いはしない。私はただ一輪の菊を、肛門という狭すぎる入り口に受ける花器としてのみ存在を許されていたようだ。

妻の目に私を晒し尽くした後、彼が私の肉体に加えた辱めと打ち打擲とは、今更、思い出たくはないものだった。

結局、コンプレックスという一語が、彼の行為を巡る結論として脳裏に浮かんだが、それだけでもないような気もしていた。

彼は、私の肉体を花器に見立てる演出をしたが、決して妻が花を生ける姿ばかりでなく、私の恥ずかしい姿態の全てに、レンズを向けることは、たえてなかった。

私の部屋の、開け放した窓から聞こえるパルティータは未だ途切れてはいなかった。

私は清冽なバツハが聞こえるよう、窓を開いたままカーテンを閉め、部屋の中央に姿見を運んでパジャマを脱いだ。

鏡に映る若い裸身は、かつてと同じように十分美しいと思いたかったが、一か月に渡って彼に責めさいなまれた身体には深い澱のような影が差していた。

彼の好みの菱縄で、いつも縛られる両の手首と二の腕には、縄で擦れた赤黒い染みが消えることがない入れ墨のように残っている。下腹部を見やれば、かつて黒々と豊かだった陰毛は毎日のように剃刀で剃られ、生気を失った性器がユーモラスに露出している。

後ろを向いて振り返ると自慢のお尻が一番先に目に付く。日毎続いた打擲が皮膚の回復を越え、今や漆黒のかさぶたさえ、滑らかだったお尻の曲面に点在していた。

もう私の肉体は美しくはないと、私は確信した。いかに彼が毎日、愛おしむように抱こうが、もう私は美しくはないのだ。それでも私はまた彼の元へと出掛けて行くのか。

今日もきっと、彼のセクシーなバリトンになぶられ、蔑まれ、そして煽られて私は燃え

立つのだ。鏡に映った裸身の深奥に官能の炎が微かに見える。その炎に焼かれて私は、未だかつて知りもしなかった世界に、時空を越えた存在の証を求めているのか。

いや、私自身が存在の証として、鞭打たれる尻の痛みや、性器に突き立てられる異物の圧迫感、全身を縛られ支配される刺激的な屈辱感に悶え、感覚と想念の全てを官能に捧げることによって、日常を取り囲む世界とその全存在を、逆に証明しているのだ。

似合いもしない難しい答えを出そうとすると辺りの静けさが身に滲み、日毎彼が招く煌々と明るい冥界への標としてまた、背筋をくすぐるバリトンが今にも、この部屋にさえ響いて来るような気がした。

いつしか、彼のお気に入りのパルティータもやんでいた。

秋空だけがカーテン越しに青く、ひたすら青く目に映え、日常からポッカリ抜け落ちてしまった白々とした私の裸身が一瞬、まっ青に染まった。

目にしみるブルーのせいか、また一筋、私は涙を流した。

5 逆転

築三百年の屋敷の引き戸を開け、土間からスタジオに上がって声を掛けたが、彼の返事がない。

いつも私を待ちかねていたように飛び出して来た彼の姿が、今日に限って見えなかった。勝手にソファのところまで通り、所在なく三脚にセットしたままの埃を被ったハッセルブラッドのシャッターを切る。カシャとミラーアップし、シャッター幕の走る音が静まり返ったスタジオに響いた。

私は歴史の重さの中から家内の気配を聞き取ろうと、耳を澄ませた。

「うー、うー」と言う押し殺したうなり声が、一か月前に私がワンピースを脱いだ衝立の裏側から聞こえて来る。

不気味なうなり声を追って、遠回りに衝立の後ろに回ると、床の上に仰向けになった彼と出会った。彼は全裸で、身体をエビのように折り曲げ、勃起したペニスを自分の口でくわえ込もうとしているようだった。

「おはよう」と私が声を掛けたが、彼は応えることも自分のペニスをくわえることもできはしなかった。彼の口には、夏の祭りに市役所が配った豆絞りの手拭いできつく猿轡が噛まされていた。大きく膨らんだ頬から、口中にも布きれが押し込まれていることが分かる。

「ユニークなファッションね」と、私がからかっても彼はただうー、うーと唸るばかりだ。

素裸の彼は、いつも私がされているように、あぐらを組んだ姿勢で両足首を縛った縄を首に回して引き絞り、仰向けになって尻を宙に突き出している。勃起したペニスを除けば、日毎私が責め苛まれていた光景と同じだ。年の割に新鮮な、ピンク色をした肛門が天を睨み、おかしいことにヒクヒクと肉襞を蠢かせている。

一瞬にして私に分かったことは、この異様な状況は全て、彼自身が演出したに違いないという事だった。

全裸で、ペニスと尻を突き出してあぐら縛りになり、口に猿轡をした彼の両手は、背後で握手をするように握り合っているだけなのだ。

裸の尻を突き出し、左右に振っては「うーうー」と誘うようにうめく彼に、つい余計なことをしてしまった。

私は、彼の身体の脇に、これ見よがしに置いてあった黒い皮鞭を、思わず手に取ってし

まったのだ。

この一か月間、毎日彼に打たれたように私は、その皮鞭で彼の剥き出しになった尻とペニスを、力任せに打った。

鞭打つ度に彼は、自分で厳しく掛けた猿轡の中から「ふぁーふぁー」と、聞きようでは歡喜に堪えかねたかのようなうめき声を洩らした。

私を挑発する欲情したうめき声が憎らしく、私は無我夢中で何回となく、彼のびくびくと蠢く肛門と勃起したペニスを目掛け、鞭を振るった。腕に鈍い疲れを感じ始めたころ、ピシッとひときわ高い音を立て、鞭が尻の割れ目に食い込んだ。その途端、逞しく勃起したペニスから白濁した精液が宙に、ピュッと飛んだ。一回、二回、ペニスは小刻みに痙攣して白い液体を宙に飛ばした。この液体がいつも、私の体内にも飛んでいたのかと思うと悔しくなり、右手に握りしめていた皮鞭を再び振りかぶり、また十数回、したたかに彼を打ち据えた。

素裸の身体全体を激しく震わせた後、彼は失禁し脱糞したが、ペニスはまだ勃起したまま宙を睨んでいる。思わず、手にした鞭を真横に裒うように振るってペニスを打ち叩いた後、私はショーツを脱ぎ捨て、屹立したペニスを身体の奥深くまでくわえ込んだ。

私が激しく腰を上下させる度に、括られた口から歡喜のうめき声が高まる。

これまでの私たちが静なら、現在の私たちはもはや、激動の時を迎えているのだと私は思った。

これ以上の乱暴はないと思われるほど強い意志で彼を弄ぶと、なんと彼は、二度目の射精を私の体内に満ちよとばかりに放って失神した。

あぐらを組んだまま両手を横に広げて倒れている彼の、足首を縛った縄を私は解いた。頭の上に屈み込み、肩に両手を掛けて上半身を起こさせる。彼は気が付いているのか、いないのか、本当のことは分からないが、首をだらんと下げたままである。その無防備すぎる態度が憎らしく、私は足から解いたばかりの黒い麻縄を取って、両手を後ろ手にきつく縛り上げた。両手首を結んだ二本の縄尻を、カ一杯頭上へ引き上げると彼は「うー」と言ううめき声を上げた。かまわず、引き絞った縄尻を首に回して結び目を作った後、残った縄で両腕の二腕を厳しく緊縛した。

薄く目を開いている彼に「立ちなさい」と命じる。

命じられるままに、よろよろと立ち上がった彼は、萎んで小さくなったペニスを隠すように横を向いた。

だらんと垂れ下がったペニスの周りや両腿の間には、精液と排泄物がこびり付き、ツンとする悪臭が鼻を襲った。反射的に足下に落ちていた鞭を拾い、再び力任せに尻を打った。

尻を打ちながら浴室に追い立て、汚れた身体に熱いシャワーを浴びせた。湯の熱さに彼は呻き、後ろ手に縛られたまま逃げようとするが、私は鞭を振るって彼を追いつめ、萎んだペニスを目掛けてシャワーを浴びせ続けた。猿轡で歪んだ顔を左右に振り、身悶えして苦しんでいた彼は、小さく萎んでいたペニスを、ゆっくり、むくむくと勃起させる。

無性に腹が立ってきた私は、後ろ手に緊縛され自由の利かぬ彼の身体に足を掛けて、檜張りの浴室の床に押し倒した。

後ろ手に縛られた腕を床でしたたかに打った彼は、その痛みに猿轡の中で咽せ、苦しそうに鼻で喘いだ。私は彼の後頭部に手を回し、猿轡にした豆絞りの手拭いを解いた。口を割っていた手拭いを外すと、彼は自分の舌の力で口中に残っていた布を出した。その布はいつか、私が生理の時に彼が、私を責め苛んだときに穿かせたショーツだった。

「変態」と私は叫び、顔の上に裸の尻でしゃがみ込んだ。よく伸びる彼の舌が焦ったように動き、私の性器や肛門をべろべろと舐める。既に私も、完全に変態の仲間入りをしていた。

彼に心ゆくまで陰部を舐めさせながら、私はペニスを見下ろしていた。パンクしそうなほどに勃起し、屹立した亀頭の先には、透明な粘液が沁み出している。私は淫らに腰を振って彼の舌を焦らし、自らの快楽を楽しみながら彼の口から解いた手拭いを拾い上げた。手拭いの端に歯を当て、幅五センチメートルほどに一息に引き裂く。シューという、かん高い布の裂ける音が浴室にこだましたが、彼は一向に気にせず、口中を唾と私の愛液にまみれさせて舌を使っている。

私は引き裂いた手拭いの切れ端を両手で振り合わせ、細い紐を作った。

彼に舌を使わせたまま身体を屈め、股間へと近づく。幾分斜めの角度を取って屹立しているペニスの根元を手拭いで作った細紐で二巻きした。紐の両端を持って力を入れ、根元を締め付けると、舌の動きが一瞬止まった。堅く結んで余った紐を持って私は、ペニスを前後左右に引き回して弄ぶ。止まっていた舌が急に活発になった。堅く丸めた舌が狂ったように、私の性器と肛門に狙いを付け、侵入しようとして突き出される。

目の前で紐の動きに連れて首を振る赤く勃起したペニスは、根元を緊縛したために濃い紫色に変色していく。

私は紐を握ったまま彼の顔が見下ろせるように、しゃがみ込む位置を変えた。ペニスか

ら伸びた紐を股間を通して背後に回した手で持ち、紐を引き絞ると、水平になっていたペニスが堂々と直立した。片手を股間に伸ばし、怒張したペニスを支えながら私は、ゆっくりと腰を使い、徐々に身体の奥深く彼のペニスを愛おしむように受け入れていった。

中腰でいることに疲れると、私は容赦もなく彼の股間の上に座り込んで休んだ。ペニスは堅く勃起したままで長い時間、生意気に私の体内の一部を占め続けた。

見下ろす彼の顔はもう、上気して火照ってはいない。幾分青白くなった顔の額のあたりには脂汗が滲み、口と鼻で荒い息をしている。しかし、見開かれた目はしっかりと一点を見つめ、快樂の糸のように細い道を一心に追い求めている。

何度目かの絶頂を味わった後、私は勢いあまり、ペニスを私の外に置いて行ってしまった。性器の中には結び目が解けた紐だけが残し、その端が垂れ下がっている。解放されたペニスは黒く充血し、亀頭の先から白濁した精液が、彼の鼓動に応じて血のように滲み出していた。

全身汗みずくになった私は、腰が抜けたように彼の股間に座り込んだ。堅く勃起していたペニスが、徐々に小さく萎んでいくのが、肛門の括約筋を通して鋭敏に感じられる。

私は「ふー」と大きく息を吐いた。

浴室の冷たさが汗まみれの肌を刺す。

立って行って給湯器のスイッチを入れ、浴槽の蛇口を開けた。ジャージャーと湯の落ちる音と、立ちこめる白い湯気が浴室を満たしたが、横たわったままの彼は身動き一つしなかった。

6 記念写真

彼を後ろ手に緊縛したまま、私は彼と一緒に湯に浸かり、彼の身体と私の身体を丁寧に洗った。彼は一言も話さず、私にされるままに従っていた。

身体を洗った後、また一緒にゆっくりと湯舟に浸かった。

身体の芯まで湯の温かさが伝わり、緊張し疲れ切った筋肉をほぐしてくれる。とにかく、一仕事した後の風呂は忘えられない程良い。

ぼかぼかと温まった体で、私たちは浴槽から上がった。洗い場の檜の床に正座するよう彼に命じる。

私は浴槽の縁に腰を掛けて、命じられるままに跪いた彼を見下ろしていた。手には昨日までさんざん私のお尻を打った、彼愛用の黒革の鞭を握っている。思えばこの皮鞭は、私の分身のようなものだった。一か月に渡って尻や乳房、肛門や乳首、性器にまでも打ち下ろされ、汗と涙と血を吸い取った艶やかな黒い鞭は、かつての私の肌のように美しく輝やいている。

その皮鞭をピュッと一閃し、跪いた彼の肩先を打った。

「何とか言ったらどう」と言って返す鞭で反対の肩に一撃を加える。

「ひっ」と呻き、眉をひそめた彼は、後ろ手に縛られた上半身を戦かせた後、やっと口を開いた。

「素敵だった、本当に素敵でした。最高ですよ」

「何が素敵で、何が最高なのよ」

冷たく言って、正座した腿の付け根を狙って鞭を振り下ろした。女のように陰毛しか見えないデルタの手前で、鞭が音を立てる。

萎んだペニスを見せないように正座した彼が気に入らず、足を開くよう命じる。命ぜられるままに膝を開いた彼の股間に手を入れ、萎みきった小さなペニスと陰囊を持ち上げたまま、再び足を閉じるよう命令した。膝を閉じて正座したデルタの陰毛に隠れてしまいそうなほど惨めに、みすばらしいペニスがユーモラスに露出している。私は鞭の柄で、可愛らしく顔を出しているペニスをなぶった。

ひょっとしてまた、逞しく勃起するかもしれないと思った期待は裏切られ、いくらなぶっても、萎みきったペニスは荒々しい反応を見せようとはしなかった。

「早く言いなさいよ。何が素敵で、何が最高だったって言うの。たまさか、この萎みきったペニスが、素敵だ、最高だと言って喜んでいるだけじゃあないの」と言って、ペニスの横に左右に分かれて飛び出している睾丸を鞭の柄で強くこずくと「んー」と身を振って唸り、身体を前に屈めた。うなだれた首に、すかさず尻を乗せて馬乗りになり、両腿に力を込めてきつく挟み込む。剥き出しの性器に彼の襟足が触れ、チクチクと突き刺す刺激が性感に信号を送り、再びほの暗い快楽の淵に小さな火が燃え上がりそうになった。

「いや、そんなことはないんだ」

今日初めて聞くはっきりとしたバリトンが、お尻の下から響いた。

「決して、私の性を満足させるためだけに、あなたが必要だったんじゃない。私はあなたと居るときだけ、憧れていた向こうの世界に行くことができるんだ。これまで、レンズを通してしか近付けなかった悲惨と苦悩、そして無垢の美しさに満ちた世界に、今、あなたのお陰で住むことを許されたんだ」

何を馬鹿なことを言うかと思ひ、首を締めた両腿に力を加えた。彼はまた「うー」と呻き、全身を強くブルブルと震わせる。

「ああ、お願いだから、あなたの性器を舐めさせてください。もし叶うことなら私を、あなたの快楽のために奉仕させながら責め苛んでください。お願いします。もう私には、写真を撮る必要がないし、撮ることもできない。だって、あなたが居るから。所詮、写真なんて、果たされぬ希望を現実から切り取ることしかできはしない。しかし、あなたという今は、そのまま全てが私の現実なんだから。ねえ、お願いします。あなたの性器を舐めさせてください。そして、私のペニスを、肛門を、もっともっと、厳しく責め苛んでください。お願いします」

「写真を撮らなくなったあなたに、どんな世界が残されているというのですか。たとえ、あなたの全人格を掛けても、現実の中で、あの作品に対抗できる世界が生まれる可能性はないと、私には断言できます」

「私は新しい世界を表現したいなどと言っているんじゃないんだ。ただ、あなたと一緒に、もう一つの世界に、現実に存在し、私が写真に残した世界に行ってしまいたいだけなんだ」

全裸後ろ手縛りに緊縛されたまま、熱い口調で理解できぬ計画を語る彼はユーモラスだ。乗り出すようにして熱弁を振るった股間のデルタからはまた、小さなペニスが隠れてしまっていた。

「今、隠してしまったペニスが、快樂の果てに、不思議なユートピアの扉を開いてくれるって訳なのかしら」

「そんなんじゃあないんだ」と大声で言った彼は突然立ち上がり、目の前で足を広げ、醜悪なペニスを全身で反り返るようにして突き出した。私の眼前で、怒りに震える小さなペニスが、小刻みに揺れた。

「こんなものは私にとって、どうでもいい物なんだ。断ち切ってしまってもいいと思っている。たかが手段にしかすぎない物を、あなたは至上の物のように言って私を貶めてばかりいる」

「本当かしら」と私は言って小首を傾げ、小さなペニスを根元まで口中に含んだ。慌てて腰を引こうとする尻に素早く両手を回し、抱きかかえるようにして引きつけ、口に含んだなよなよとしたペニスを舌で弄ぶ。唇と舌で緩急リズムを付けて弄ぶと、ペニスが遠慮がちに口中で膨らんできた。

私も立ち上がり、背後に回した手で後ろ手に縛った縄の結び目を解いた。緊縛を解いても、彼の痺れきった両手は、だらんと下に垂れ下がったままだ。呆然と突っ立っている彼を抱きしめ、口を強く吸った。私の口の中におずおずと差し込まれて来る彼の舌が可愛くて、私は、十分違う世界を体験させて貰っていると思った。何がそんなに不十分だというのか。私には分からなかった。

ひとしきり抱き合った後、私たちはなんでもなかったかのように手を取り合って裸のまま浴室を後にした。

スタジオに戻り、ソファーに並んで腰を掛けた。この一か月で初めてのことだ。裸で一緒に並んで座っている二人。まるで恋人同士みたいだった。

「記念の写真を撮ろうか」と言って彼は、三脚に載った埃を被ったハッセルブラッドの側まで立って行った。カメラのフィルムマガジンをポラロイドパックに替え、セルフタイマーをセットする。ジーというタイマーの音を背に、急いで帰って来る股間で小さなペニスも揺れている。私は、いつになく穏やかな顔をしていると感じながら、彼と一緒にカメラに収まった。

できあがった写真は、照明を使わなかったため少し暗い。斜めに構図を取っており、画面手前に膝を揃えて足を曲げている私が映っている。手は品よくデルタを隠すようにしている。表情は静かで、目と口元に優しい微笑みを湛えていた。いい写真だ。さすがにプロと思ってよく見ると、私の裸身に隠れ、彼は顔しか映っていない。その顔も悪戯そうに笑

っているようだ。何となくまた、だまされたような、くすぐったい気持ちが裸の全身を包んだ。

「記念だから、持って帰ってください」と差し出された写真を、思わず受け取ってしまった。なんの記念だろうかと思案する間もなく彼が、

「明日もまた、来てくれますね」

珍しく念を押した。しばらくなかった別れの言葉に、私はちょっぴり動転し、しっかり首を縦に振ってしまったのだ。

帰りの車の中で、肉体に痛みが残らなかったのは彼を送って来た日以来のことだった。久しぶりに清々しいコンディションで、くねった山道を運転できると思った途端、言いしれぬ寂しさがこみ上げて来た。今日私は、彼から何もしてもらえなかった。たった一枚のポラロイド写真は、その記念ということなのか。私に弄ばれて喘ぐ彼の姿が一瞬甦り、黒々とした霧のような感情が私を支配した。

「まあ、いいや」と、私は心の中で声を出した。とにかく今日は、お尻も乳首も責められることはなかったのだから。

明日のことは、明日という日が決めることだ。

7 暴虐

この一週間は、私が彼を責め苛み続けた。

彼は、私に辱められ痛めつけられることに日毎没頭して行くようだったが、私の不満はつのがって行った。彼を縛り、鞭打ち、肛門とペニスを弄び、奉仕させることで、私自身の快樂もまた、どん欲に追い求めてはいたのだが、何故か一人、取り残されたような寂寥感を感じ出していた。

これまで彼に手酷く責められはしたが、私が呻き、泣き、悶え、恥ずかしさに赤くなるのがきつと、彼の快樂なのだろうと思い、そう思うことで私も異常に官能が燃え立ち、被虐を越えた快樂の淵に深く沈み込んで行けたと思っていたのだ。しかし、彼を苛め抜く中で、彼を道具として得られる私の恍惚感を決して、彼と繋がっているとは思えなかった。クライマックスで彼が感じるらしい絶頂感もまた、彼を鞭打ち、肛門を責め苛んでやる私とはまるで関連がない、彼自身の出来事であるかのように見えた。恐らく、彼の性への関心が変わったのだ。あるいは、私を置いて彼自身の感覚の世界へ一人で出掛けようとしているのだ。私はその旅立ちの、切符切りでしかないのかも知れなかった。確か一週間前、彼は自分の裸身を自分で縛り、猿轡まで噛ませて、参加者としての私を誘ったのだった。

恐らく彼は、私を残したまま彼自身の言う向こうの世界に、もう一人きりで踏み出しているに違いなかった。

許せないとは思った。私を誘い、責め苛み、快樂の淵に立たせるのはよい。また、私の手に鞭を握らせ、自分の尻を打たせ、醜い嗜虐感を満足させて、二人の性をより淫らなものへと導いて行くのもよいことだろう。だが、なんの支えもない恍惚に耽る私を、まるで蜘蛛の糸のように使って、自分の中の深くて暗い底なしの深淵へと降りて行くことは、絶対に許せることではなかった。だって彼は私の神でもなく、父でもなく、弟でもない、ただの男性にすぎないのだから。

そんな私の気も知らないで今朝も、母屋の引き戸を開けてスタジオに上がるとすぐ、彼はソファから立って来た。

気ぜわしく、手を取らんばかりにして部屋の中央に私を誘うと、一人で服を脱ぎだした。恥ずかしげも無くパンツまで脱ぎ、素っ裸の尻の上に両腕を重ねて組み、後ろ手に縛り上げるよう催促する。これまで私は、彼が裸になるまでの間に、黒い麻縄や鞭をアルミケー

スの中から出して準備し、彼が背中を向けるとすぐ、後ろ手に緊縛してやっていたのだ。

だが今朝は、私は何もしない。ユーモラスに裸の尻の上で両腕を組み、催促するように振り返った彼の顔を、にこやかに見返した。

私を訪れた変化にやっと気付いた彼は、訝しそうに尋ねた。

「どうかしたんですか。夜更かしでもして、まだペースに乗れないのかな」

「いいえ、夜更かしもしていないし、ペースに乗れないわけでもないわ。ただ、あなたを縛りたくないだけです」

「えっ」と言ったまま彼は絶句してしまった。予期しないことを聞いた風に、私の言葉を反芻しているようだ。

「何か気に入らないことでもあったんですか。私が悪いのなら謝りますから、気分を直して楽しんでいてくださいよ」

「謝る必要などありません。私の好きで、あなたの元へ通って来ているだけですから。でも今日は、縛るのは嫌なんです。どうしても縄が必要なら、以前のように私を縛ってください」

「そんな難しいことを言われても困りますね。あなたの身体はもう、十分すぎるほど縛ってきたじゃないですか。駄々をこねるのはやめてください」

「誰が駄々をこねているんですか。私は縛るのが嫌なんです。どうしてもと言うなら、私が縛られてもいいと言っているのに、あなたは自分の好みにばかり執着している」

かみ合わない会話がしばらく続いた。彼は素裸のまま、辛抱強く私を説得しようとする。「今日のあなたは、本当におかしいですよ。昨日までは、なんの問題もなかったじゃないですか。変ですね、本当に変ですよ。一週間も上手に私を責めていたじゃないですか。どうして急に、変ですよ」

「あなたの方が変でしょう。一か月も私を縛りまくったくせに、急に縛られることが好きになってしまうなんて、納得がいきません」

「あれはあなたに、こういうことに慣れて貰いたかったからなんですよ。もう十分役に立ったと思いますよ」

思わず彼は本音を洩らしていた。やはり彼は、自分一人の世界に閉じこもるために私を利用したのだ。カッと全身の血が熱くなった。

「やはり私を利用していただけなのね。私も楽しんだのだから、別に利用されたって構わないけど、哲学者ぶってマスターベーションに耽るのはやめたがいいわ。何が向こうの世

界に行ってみないかですか、悲惨と苦悩、無垢の美しさに満ちた世界ですって。そんなものは一生掛かったって、あなたに縁のない世界だわ。せいぜいレンズを通して覗き込むのが分というところよ。それを、自閉的で卑猥な手段を使って現実のものにしようとしたって所詮、変態崩れがいいところだわ。たかが性的な異常を拡大解釈して、狂気の世界と結び付けようとしても、そうはいかないわよ。ガリガリ亡者の変態に見込まれたヴァイオリンの少女たちが可哀想でならないわよ。あなたも分相応に、ちょっとは社会性ってものを身に着けたほうがいいわ」

私は一気にまくし立てたが、最後まで言うことはできなかった。

頬に熱い痛みが襲い、パシッという音が耳元で響いた。倒れそうになった反対の頬にまた、平手打ちが襲い、顔全体が痛みで熱くなった。ジーンと痺れた耳に、彼の怒りのうなり声が聞こえるようだ。

揺れる視界に、全身を怒りで真っ赤に染め、仁王立ちになった彼の裸身が見える。最前まで萎んでいたペニスが、極大にまで勃起していた。

また二発頬を張られた私は、床にくずおれてしまった。すかさずのしかかってきた彼が、凄い力でジャケットとスカートを引き剥がす、恨みを込めるように衣類を遠くに投げ捨て、なおも倒れた私の頬を打った。

私の顔はきっと、真っ赤に腫れ上がってしまったに違いない。

「顔を叩かないでください」と見上げて抗議したが、彼の顔つきはこれまでと全く異なり、暗く凶暴な険が刺していた。顔中を涙と鼻水だらけにして私は、抗議し哀願した。

「ふん」と鼻で言った彼は、私のブラウスに無造作に手を掛け、いとも簡単にブラジャーごと引き裂いてしまった。上半身裸にされて小刻みに震えている乳首を指先で強くはじく。痛みが頭の芯まで響いて来るが、習い性になった肉体は悲しく、乳首の先が堅くなっていくのが分かる。

「へっ、夏の朝と変わっちゃいないな」と呟いて彼は、ひときわ強く私の頬を張った。街のちんぴらと少しも変わらないモードだ。

あふれ出る涙の中で私は、初めて彼と出会った夏の日のことを思い返した。あのとき、汗に濡れたTシャツから透けて見える乳首を、じっと見つめられていたような気がしていたが、やはり逆光になった黒い顔の中で、私の乳首を値踏みする目が爛々と光っていたのだ。

ひょっとして私は、ここで殺されるかもしれないと思った。そう思った途端、ゾクッと

する恐怖がこみ上げ、全身に鳥肌が立った。

「望み通り縛ってやる。縄と鞭を持って来い」

ショーツの端を片手でつかんだまま彼が命じる。殺されるかもしれない恐怖に戦っている私は「はい」と言って跳ね起きた。同時に、端を捕まれたショーツが足首まで脱げ、両足を拘束する。アルミケースのところまで行こうとしていた私は、足首に絡まったショーツに足を取られ、素裸のままおろおろとしてしまった。

ようやく歩き出した私の尻を、立ち上がった彼が力一杯蹴り上げた。二メートルほど蹴り飛ばされた私は、胸から床に倒れ込む。一瞬息が止まり、続いて床で擦れた乳房と、蹴り上げられた肛門を中心にしたお尻に激痛が襲った。

「急げ」

背後から彼が怒声を浴びせる。私は、本当に殺されるかもしれないと思い、痛みを堪えて這い、黒い麻縄の束と鞭を持ち帰った。

縄と鞭を膝の前に置き、素裸で正座した私に彼は「縛ってくださいと頼め」と命じる。

「縛ってください」と、か細く言った途端、頬に平手打ちを食った。

「違う、私が教えてきたようにお願いするんだ」

もう声は、深みのあるバリトンではなくなってしまうていた。かん高いかすれた音が、まるで違う男の声のように彼の口に溢れる。打たれてヒリヒリと痛む頬にまた、涙が流れた。

私は冷静さを取り戻そうと、奥歯を噛みしめてから声を出した。

「どうぞ、私の素っ裸の身体を恥ずかしく縛り上げてください。淫らな乳首と尻を鞭打ち、卑猥なお尻の穴とおまんこを、こころいくまで弄んでください、お願いします」

「よしっ」と彼が頷き、私は彼に背中を向け両腕を背中に回し、縛りやすいように首の方へ手を高く上げた。うなだれた頬を止めどなく涙が流れる。

彼は荒々しい手つきで、荷造りをするように私を縛り上げていく。

いつもと同じ菱縄に緊縛されたが、乳房や腕の裏側、ウエストなどの柔らかい肌が、二重に回された黒い麻縄に荒々しく挟み込まれる。縄目に挟まれる度に柔肌が悲鳴を上げ、全身が針で突かれるような痛みに震えた。私を縛り上げるときはいつも、縄目に肌を挟み込まないように十分気を使っていた彼だが、今、そんな配慮はない。

身体のあちこちで縄目に挟み込まれた素肌がひきつって、辛く痛む。まるで罪人のようだと思ったが、罪人でも全裸で縛られはしまい。優しさを欠いた彼の仕打ちはこれまでと

違い、立派な拷問だった。本当に殺されるかもしれないと、私はまた思った。

全裸後手菱縄縛りに私を緊縛し、しばらく身体に食い込んだ縄目を楽しそうに検分した後、彼は「立て、立って土間に降りろ」と命令した。ぐずぐずしてまた、顔を叩かれたくなかった私は、そそくさと立ち上がり、早足で土間に降り悄然とした風情で素早く冷たい土の上に正座した。命令して置いて、取り残される格好になった彼は、怒りに油を注がれたように燃え上がり、凄惨な形相で私を追って土間に飛び降りた。右手には、愛用の黒革の鞭がしっかりと握られている。彼を挑発した付けは、たっぷりと支払わさせられそうだった。

「四つん這いになって尻を高く上げろ。この性悪女め。私の世界を蔑んだ罪を十二分に罰してやる。もう二度と私の美しい世界には近付けないようにしてやるからな」

自分の怒りをなおさら高めるように、彼は吼え立てた。

やはり私は彼にとって罪人であるらしい。たとえ殺されるにしても、付け入る隙は見い出せるだろうと私は思い。できるだけ従順に振る舞う。しかし、四つん這いになれと言われても、両手を後ろ手に縛られた私に前足はない。彼を刺激しないように急いでバランスを取りながら、両膝に神経を注いで前屈したが、やはり前頭部をしたたか土間で打った。姿勢を変えて、横顔と肩を前足にした私は、彼に命じられる前に両膝をできるだけ開き、肛門と性器を思い切って宙に突き出した。

目一杯開ききった陰部を、冷たい空気が容赦なくなぶり、寒い。この皮膚感覚も、少しの間の気休めにしかならないと意識した途端、鋭く空を切る鞭の気配が周囲を押し、一切の意識も、音も、打ち叩かれる皮膚の痛みに飲み込まれた。

黒い皮鞭は、高く突き出した私の尻を縦横に四回なぎはらった。今までと違い、刑罰を加えられる感覚の痛苦が、四つの筋となってお尻を貫いて行った。余りにも鋭く、差し貫かれるような痛みに私は、尻の皮膚が鞭の打撃に裂かれ、血が滲み出しているのを、なま暖かい感触で知った。

拷問に堪えかねた女囚が這いつくばるように私は、冷たい土間の上に突っ伏してしまった。しかし今回は、失禁もしなければ失神もしない。十分に誇らしくはあったが、却って失神した方が楽だったのかもしれない。

「強情な奴め、まだ懲りないか。見掛け倒しのエリート女め。何が自閉的だ、何が社会性がないだ。私が身を切られるような痛みを持って、友人たちと築き上げてきたネットワークも知らないで、いっばしの批評家面をしやがって。今、私の築き上げた社会をたっぷり

見せてやる。さあ、その臭い尻を高く、これ以上恥ずかしいことはないと言うほど高く持ち上げろ。骨の髄まで思い知らせてやる」

声が消えないうちに三発、突っ伏したお尻が鋭く打たれた。私は歯を食いしばって悲鳴も上げずに耐え、ゆっくりと落ち着いて再び、血塗れたお尻を天高く突き出した。

「うー」と言う獣のような叫びの後、彼が握った鞭の太い柄が肛門に振り下ろされた。激しく打ち叩かれた打撃の後、肛門が切なく跳ね返した鞭の柄が再び、彼の凄い力でグリグリと括約筋を無理に押し割る音が、まるで現実に聞こえるような陰惨な幻聴を伴いながら、私の体内へと暴力的に挿入された。柄の根元にある直径三センチメートルほどの玉と、長い柄の大部分を差し込まれた肛門は無惨に裂け、お尻から腿に掛けて、生暖かい血液が伝い落ちる隠微な感触があった。

私のお尻に黒い皮の尻尾を付けた後も、彼の怒りは止まらなかった。

新しい縄で首を犬の首輪のように縛り、縄尻を持って尻から血を滴らせた私を強引に引き立てる。肛門を裂かれたショックで全身の血が凍り付いた私を、更に首を絞めた黒い麻縄が脅迫する。強く縄尻を引かれた私は、窒息する恐怖から逃れようと、彼の引く縄尻が張り切らないように、おろおろとユーモラスに、後ろ手に緊縛された裸身を揺らせながら、縄尻を引く彼に付き従う。

彼は、まるで犬の散歩に出かけるように首縄を引き、玄関の引き戸を開け足早に戸外へと向かう。外に引きずり出された私の目を眩しい秋の陽光が打った。明るすぎる光は情け容赦もなく、素裸で緊縛され、お尻に皮鞭を突っ込まれた惨めな身体を照らし出したが、私は恥ずかしがっているいとまなどはない。首縄を引っ張る彼に遅れないよう、ただただ外聞も考えず、みっともなくお尻を振り立てて足早に歩く。素足の柔らかな皮膚を、山の小石の鋭い角が手酷く痛めつけるが、足を止めるわけにはいかない。

ロードスターを止めた木犀の反対側にある、これも大きな曲がりくねった松の下で、彼は歩みを止めた。ほんの十メートルの距離だったが、私は息が切れ、緊縛された乳房を弾ませた。そんな私にお構いなく彼は、首を縛った縄尻を垂れ下がった松の枝目掛けて投げた。枝に掛かった縄尻を引き絞り、無造作に首縄で止める。私は絞首刑になる罪人のように、松の枝から吊り下げられてしまった。ただ嬉しいことに、両の足の裏はまだ辛うじて大地を踏みしめていた。

痴話喧嘩という言葉が不意に脳裏を掠めた。素裸の私を松の枝に吊した彼も素裸なのだから、外見には十分痴話喧嘩に見えるかもしれないが、白昼堂々と繰り広げられた彼の行

動は、もう常軌を逸し過ぎていた。これはもう、私の生死が賭けられた拷問に相違なかった。

私を松の枝に吊した後、彼は無言で母屋に入り、僅かの時間でだらしなく服を着て戻って来た。手に割り箸と、帯締めのような組み紐を持っている。

「ここでしばらく、頭と身体を冷やすがいい。私はこれから、あなたに会わせてあげるために、大切な友人を招待して来る。その汚れきった醜い目で、美しい世界の住人を見るがいいのだ」

そんな人はあなたの奥さんだけで十分ですと、応えようとした私の顎を彼の左手がつかんだ。

「こんな山の中だから心配はないが、大きな声を出されて家族が興奮するといけないから、猿轡をしてあげよう。口を開いて舌を出しなさい」

言うことを聞かない私の鼻を彼が強く摘んだ。息が詰まり、喘ぐように口を開いた私の首を吊った縄を、意地悪く揺する。窒息させられる恐怖が甦った私は、仕方なく犬みたいに長く舌を差し出した。パチンと音を立てて割り箸を割り、二本になった箸で舌の付け根を挟む。舌を挟んだ箸の両端を組み紐で縛り、二本の紐を強く引き絞って後頭部で結んだ。私の口は、突き出した舌を挟んだ割り箸をきつく、轡のようにくわえさせられ、引き裂けんばかりだ。想像を絶して過酷な割り箸の猿轡を、私はくわえ込んだ奥歯できつく噛みしめた。

「すぐ帰りますが、くれぐれも首を吊らないように注意してください。縊死した後の、糞尿を垂れ流し、ドドメ色に充血して膨れ上がった醜い顔は見たくありませんからね」

言い残して彼は、なんと、私のロードスターに乗って去って行った。急発進した後の土埃がしばし、私の惨めな裸身を包んだ。

8 官能の果て

もう、どれほどの時間を、全裸の身体を晒したままでいるのか。時の移ろいを私は、日の動きと緊縛された肉体の痛みで感じ取るしかなかった。

秋の陽の動きは早い。彼が私のロードスターで出掛けたとき、中天近くあった太陽も既に、だいぶ角度を付けて傾いて来ている。まだ、澄み切った空から注ぐ陽光は、強すぎるくらいに身動きできぬ肌を焦がすが、時折吹く風は寒く、冷たく裸身をなぶった。

不思議と人の目は気にならなかったが、誰一人訪れる者はない。つまり、救いを求めることはできず、不自由な姿勢で、不当な痛みを時の過ぎ行くままに、ただ甘受しているしかなかった。

それにしても、私の置かれている状態は既に耐え難いものになっていた。

彼が私を凄まじい格好のまま放置していったから、恐らく一時間は経過したと思われるのに、彼が出しなに割り箸で挟んで縛っていった舌は、どれほど抜こうとしてもびくともしなかった。却ってザラザラと毛羽だった材質で擦れた舌がヒリヒリと痛む。割り箸に引き裂かれた口中には溢れるほどに唾液が溜まり、時折下を向いてこぼさないと口の端から滴り落ちた。下を向けば向いたで、首に巻かれた縄が張り切り、息が詰まって咽せる。縄を掛けた松の枝は直径五センチメートルほどで、体重を掛ければよくしなったが、撓みが戻る反動がより凄まじく呼吸を脅迫した。

進退窮まって脂汗を流している私の肌はいつしか、冷たい秋風になぶられ鳥肌立っている。

精一杯両手を空に伸ばして深呼吸でもしたいところだが、両手は背中に高手小手に緊縛されていて、痺れた痛みを訴えるばかりだ。たまらず足踏みをしてみても虚しく、いづらか体が温まる前に、肛門に差し込まれた黒革の鞭の柄が不愉快に揺れ動く感触が情けなくなり、すぐさま悄然とうなだれるばかりだった。この肛門に突き刺された鞭の柄もこれまでに、何とか苦勞をして抜き捨てようと試みたのだが、虚しい努力に終わっていた。救いの来ないことを確信したときから折に触れ、恥ずかしい状況になるのを覚悟の上で、屈辱の鞭の柄を、うんちとともに押し出そうと何回となく息んでみたのだが、長さ十センチメートルほどの鞭の柄を押し出すことができただけで、柄の端にくびれて付いた大きな玉を排出することがどうしてもできなかった。無駄な努力のせいで、お尻から突き出た鞭は、肛

門の中に残った大きな玉を中心にして、なおいっそう屈辱的に、私の動きに連れて鋭敏に揺れ動くことになったのだ。

追い打ちを掛けるように尿意が襲った。

しばらく両腿を合わせ、お尻から付き出した鞭を揺すりながらもじもじしていたが、いがり坊主みたいになった陰毛がこそばゆく陰部をなぶる。思えばもう一週間も彼に刺られていなかったことを、ちくちくする不快な感触が教えてくれる。

えいっ、ままよと開き直り、足を開き、腰を付き出して下腹に力を入れると、太い漣が一筋、きれいな弧を描いて股間から地面へ長い時間を掛けて飛翔した。

もう恐れるものはないと、そのとき私は確信し、まるで信仰を持ったかのような傲然とした気分になった。

私は、眼下の水たまりを愛着を持って見下ろし、私自身が冷たい秋風と一体になり、美しい自然の中に、全裸後ろ手縛りの菱縄に緊縛され、口に割り箸の猿轡を噛まされ、肛門から鞭をぶら下げた奇妙な肉体を、誇らしく晒した。

また、どれほどの時間が経ったのだろうか。彼が出掛けに注意していったように、縊死してしまいそうなまでに体力が消耗し、最後の矜持に頼って直立していたとき。遠く私道に、ロードスターの太くて低いエンジン音がこだました。

土埃を上げ、数メートル先の木犀の下に停車したロードスターの助手席に私は、始めて見る、しかし見慣れた少女の貌を認めた。

車から降りた彼は、私に一瞥もくれずに助手席のドアへ歩み寄ってヴァイオリンケースを抱えた少女を恭しく降ろした。

少女は周囲になんの関心も払わず、彼にエスコートされるままに足早に母屋へ通った。当然、すぐ側に晒されている私を見ることもない。

霞む目で二人を見送る私を待たすこともなく、一人で戻って来た彼はポケットからナイフを取り出し、猿轡の紐を切り、首を松の枝に繫いだ縄を切った。

縄を切られた瞬間に膝が崩れ、地面にくずおれた私に「まだまだ、だよ」と言って彼が、首縄の端を持って引き立てる。

残酷な仕打ちにも関わらず何故か、目に熱い涙がこみ上げ、素直に気力を振り絞って立ち上がった私を、彼は縄尻を取って母屋へと引っ張って行った。

いつも私が座るスタジオのソファーに、ヴァイオリンケースを膝に置いた少女が、淡いピンク色の暖かそうなワンピースを着て座っている。首縄を引かれてスタジオに上がって

来た私は緊縛されたまま、ソファの正面の部屋の隅に引き据えられた。

もう、先ほどの熱い涙は乾いていたが、少女の前で加えられる過酷な仕打ちにまた一筋、今度は悔し涙が頬を伝った。

「正座していなさい」

彼に命じられ、渋々正座しようとしたが、先ほど何度も息み、肛門から十センチメートルほど押し出した鞭の柄が座る邪魔をして、腰を下ろせない。正座を命じたまま背を向け、少女の方へ向かう彼の後ろ姿と、顔を伏せている少女とを等分に恨めしく見たが、私は先ほどの努力に痛い対価を払わざるを得なかった。

私は腰をもぞもぞと動かし、お尻から突き出した鞭の柄を床に垂直に立て、徐々に尻を下ろしていった、再び鞭の柄を肛門の中に自分で飲み込んでいったのだ。このユーモラスな動作はきりきりと痛みを伴い、情けない屈辱感と相まって私は、全身の血が逆流するのを感じた。

苦勞して正座しきったとき彼が振り返り、いささか得意そうな口振りで気取って演説を始めた。彼の鋭い視線を受けた私は、お尻から生えた鞭の処理の現場を見られなかったことだけを望んだ。

「あなたもよくご存じの、素敵な友だちをご招待してきましたよ。会うのは初めてかもしれませんが、彼女にあなたを紹介することはできません。あなたの汚れきった心根に触れれば、彼女の無垢な美しさが壊れてしまいますからね。その代わりと言っては何ですが、これから、あなたのために楽しいホームコンサートを開きますから、ゆっくり楽しんでください。そして、私が築き上げた素晴らしいネットワークの一端にぜひ、触れてみてください。きっと、私のことを自閉的だとか、社会性がないだとか言った戯言を、恥ずかしく思うようになりますから」

少女の隣に佇んだ彼は、かつての自信溢れるバリトンで優しく「さあ、美しい演奏を聴かせてやってください」と促す。

ケースからヴァイオリンを出して立ち上がった少女は、やにわに弓を取って演奏を始めた。

突然あふれ出た音はバッハではなく、パガニーニだった。

ひときわ狂おしい調べが、広いスタジオ全体を荒々しく圧した。しかしその調べは、公営住宅の窓辺で聴いた澄明な沁み入るような音色ではなく、気ぜわしく無神経な、不揃いの音に聞こえた。

少女の前にしゃしゃり出て、まるで指揮を執るかのように両手を振り回して興奮する彼は、私と少女の間を走るような歩みで行きつ戻りつしながら、ヴァイオリンの音色に負けないようなかん高い嬌声を上げた。

「もっと高く、もっと大きく、もっと凄まじく、あなたの美しい音を、恥ずかしくみっともない、卑猥な格好をした姐さんに聴かせてやってください。さあ、もっと、もっと、尻の穴から尻尾を生やした助平な姐さんのために囃し立てろ」

いくら私が憎々しいと言っても、二人が出会うきっかけとなった少女の音楽を持ち出す必要はない。あれほど賛美し、作品にまで昇華させたヴァイオリンの少女を余興の伴奏者扱いしたのでは、少女の音楽ばかりではなく、その全人格さえ否定し去ってしまうことになる。

少女の音楽に惹かれ、彼のバリトンに酔い、作品世界に繋がる官能を共有しようときえした私は、この悪趣味を許すことはできなかった。また、ここまで墜ちてしまった彼の感性が情けなく、それを認めてしまいそうになった自分の見識さえ恥じそうになってしまった。

一切を否定してしまいたくなった私は、声を限りに「変態め、恥を知りなさい。あなたの卑屈な心根の方が、私の弄ばれた肉体よりよっぽど恥ずかしい」と大声で叫んだ。

愉快そうだった彼の顔付きがまた剣呑に変わり、殺気を帯びて振り下ろされた手が私の頬を張った。怯むことなく私は、打たれた顔を振って声を限りに「罪のない少女を弄ぶのは止めろ。こんな獣の巣窟から早く、彼女を家に帰しなさい」とどなった。

「くそっ」と、憎々しげに私を見据えて吐き捨てた彼は、

「おまえも、こいつも、みんな俺のもんだ。よっく見ておけ」と言って方向を変え、今度は少女に向かって走り、無心にヴァイオリンを弾く彼女に手を伸ばし、ピンクのワンピースの端を掴んでカー杯引き裂いた。

ビリッという激しく布を裂く音がヴァイオリンの音色を止め、声もなく立ちつくす少女の下着を、悪魔となった彼が引きむしる。その理不尽な行為に我を忘れた私は、全裸で後ろ手に緊縛された身も省みず、お尻からぶら下がった鞭を引きずったまま彼に、全身の力を込めて頭から体当たりした。

下着をむしり取られ、ヴァイオリンを片手に持って震える全裸にされた少女の前で、体当たりされた彼はあっけなく尻餅を付いた。とたんに、真っ赤に顔色を変えた彼はすぐさま立ち上がり、私のお尻から垂れ下がっている鞭を掴んで強引に手元に引き絞った。反射

的に前方に逃げ出した私の肛門から激痛とともに鞭の柄が抜け、バランスを崩した私は、菱形に縛り上げられた乳房を下に、床に向かって無惨に倒れ込んでしまった。

肛門から引き抜いた鞭を握り直した彼は怒りにまかせ、倒れた私の裸身を縦横に鞭打った。そのうちの一発が彼を見据えた顔を激しく打ち、頬から生暖かい血が滴り落ちるのを、修羅場の中で感じた。

私の流す僅かな血を見てうろたえたのか、興奮したのか、彼はまた対象を変え、呆然と佇む少女へと立ち向かい、右手を振り上げて少女の頬を打った。二度、三度と激しく頬を打たれた少女は、ショックのあまりヴァイオリンを床に落とし、声にならぬ悲鳴を上げて部屋の隅へ逃げ込むと、両手で頭を抱え込んだまま震えあがり、剥き出しの尻を無防備に高く背後へと晒した。

ヴァイオリンを拾った彼は「俺に恥をかかせやがって、おまえはとんだ紛い物だ」と、訳の分からぬ独り言を呟きながら、部屋の隅で尻を突き出している少女へと迫る。

右手で握ったヴァイオリンを頭上高く振り上げた彼は、少女の白い、裸の小さな尻に打ち下ろした。

バシッという鋭く皮膚の鳴る音と、メキッというヴァイオリンの胴が割れる音が同時に響いた。途端に、小さな尻を突き出したまま縮み込んでいた少女が「ぎゃっー」と言う凄まじい叫びとともに飛び起き、彼の胸元へむしゃぶり付いた。華奢な両腕を奔放に振るい、追い詰められた猫のように爪で滅茶苦茶に彼の顔を引っ掻く。

突然の予期せぬ抵抗に彼が面食らい、再び彼女の頬を打ち叩こうと手を振り上げたとき、私は全身を襲う痛みを忘れて立ち上がり「これ以上、その子を痛めつけたら、私が許さない」と大音声を上げ、彼の暴虐を制止しようと全存在を賭けて突進した。

後ろ手に緊縛された両の拳を握りしめ、足が床を蹴る度に内腿の柔肌を刺す短く伸びた陰毛にもめげず、私は裸の尻の筋肉を躍動させていた。

悪魔となった彼の肉体へと私は、力の限りジャンプしたが、私の声に身構えていた彼は、少女に顔を引っ掻かれながらも、彼女を抱き抱えるようにして、するりと身をかわしてしまった。

彼の動きに対応できず、勢い余って壁に激突し、床に倒れ伏した私の首を縛った縄尻が強い力で引っ張られた。一瞬呼吸が止まり、目の前が真っ暗になった。頭の芯まで食い入る、死に至ると思われる苦痛が全身を襲った後、すっと全身の力が抜け、私は脱糞し失神してしまった。

私が死に至らず正気付いたときも、相変わらず息苦しさが続いていた。

ぼんやりした頭を微かに振って、生きていることを確認しようとする余計息が詰まった。首を縛った縄尻はソファの腕に短く繋ぎ止められ、後ろ手に緊縛された縄もそのままに、私は惨めに床に転がされていたのだった。

仰向けになった、ぼんやりした視界に二つの足の裏らしいものが見える。

目を凝らすと厚いガラス越しに、足の裏から続くすんなりと伸びた脚が見えた。その二本の脚が一体になるところに黒々とした陰毛と、肉の亀裂が見える。全裸の少女が目の上で大きく脚を開き、陰部を露出したのだ。その光景にびっくりした私は反射的に首を上げた。途端におでこを強くガラス板にぶつけてしまった。目から火が出るほどの痛みをこらえ、私は横たわった身体を無理に二十センチメートルほど床を這ってずらし、全体の視界を確保した。

「やっとお目覚めですか。楽しくなりそうですね」

うわずったバリトンが頭上から聞こえたが、見上げた私に彼の姿は見えなかった。

目の前には高さ五十センチメートルほどの、上面にガラスを張った木製のテーブルがあり、その上に全裸の少女が立たされていた。彼女の身体は私とそっくり、菱縄後ろ手縛りに緊縛されている。細い首にも三重に縄が巻かれ、縄尻は頭上の高い梁に回して止めてあった。首を吊られ、いくらか下を向いた口には身体を縛ったのと同じ縄で二重の猿轡が噛まされている。おまけに、どうしたことか、黒い布で目隠しまでされているのだった。少女の裸身が小刻みに震えているのが、視線を通して私の身体に伝わって来る。

大きく開かせられた脚の間を通過して、黒い麻縄が少女の股間を割ろうとしていた。私がいづもされていたのと同じように、黒縄が少女の未成熟な性器を挟み付け、尻の割れ目に食い込み、身体を縦に緊縛しようとしているのだ。あまりの無惨さに私は呼吸が止まり、自身で体験した激痛と屈辱を思い出し、少女の気持ちを先取りして涙を流した。

彼女には何ら、希望がないのだ。

快楽と刺激の淵に一切を投げ込んでも、まだ見ぬ地平への好奇に望みを託した私とは、まるっきり事情が違っていた。

「ひー」

激痛に襲われた少女の悲鳴が、予期したように猿轡から漏れた。

「やめなさいっ」

大きな声を出した私は、視界に入らぬ彼に向かって言葉を続けた。

「人にはそれぞれ分があるものよ。ヴァイオリンの少女は音楽の中にあってこそ美しく輝くものよ。まだ性を知らない少女に、淫らな思惑を抱くのはやめたがいい。快樂のために女を責め苛みたかったら私を責めればいい。あなたとは全く違う思惑でも、付き合っただけでやることはできるわ。私は大人の女なんだから。でも、子供を勝手に性の世界に巻き込むことは、決して許さない」

「ふふふふっ」と、鼻で笑う声が頭上で響き、少女の裸身の影から陰鬱な顔をした彼が姿を現した。

「別にあんたの許しを得ようなんて思っただけはない。また、あんたみたいなスケベ女と付き合っているほど暇でもない。私の少女は美しい精神の持ち主なんだ。スケベ女と一緒にされてはたまらない。彼女はあんたと違って、私を向こうの世界にきつと旅立たせてくれるはずだ。だって彼女は初めから向こうの世界の住人なんだから。うまくいかないはずがない。何が思惑が違うだ。向こうの世界に、思惑だとか思いやりだとかいった、面倒なものはないんだ。ただ絶対的な自由がある。これだけだよ」

「卑怯者め、恥を知らなさい。所詮淫らな快樂しか考えていない変態男め。いくら狂気を装ったところで、あなたの逃げ込む先なんてないんだ。素直に自分の性向を認め、許される範囲の楽しみに耽っていたらいい。私を含め、きつと邪魔するものなんていはいはしないのだから。少しばかりの性的異常を針小棒大に思い込んで、まるで自分が天才か狂人でもあるかのように見せ掛けるのは、滑稽すぎて笑う気にもなれないわ。今ならまだ遅くはない。少女を家へ帰し、作品の世界だけで付き合いなさい」

「何も分かっていないスケベ女の説教を聞く気はないね。私は、セックスなんかになんのか興味もないんだ。あんたと一緒にされては叶わないね。確かにあんたはただのスケベ女だが、私には確固とした思想がある。絶対自由という思想を現実のものにするために私は、好きでもないことをしながら戦っているんだ」

「あなたの思想なんてくそくらえだわ。何が絶対自由よ。何時だって、何処にいたって、今までも、これからも、ずっと、あなたは自由であった試しはないし、これからもない。つりにつのった思い通りにならない不満が、その薄汚い頭と、ちっぽけなオチンチンの中にゴミのように溜まりきってしまっただけじゃあないの。そんなあなたが生きていけるのは、写真という作品世界の中だけなのよ」

「もう言うことはそれだけかな。聞き苦しいことを、それだけ長々と喋ったのだから、後

はもう、おとなしく糞まみれの身体で横になって見物していて欲しいもんだね」

言い残して彼は、また少女の背後に消えた。彼が嘲ったように、確かに私は糞まみれだった。しかし、恥ずかしさに小さくなるどころか、これまでも増してしっかり、彼のやることを見据えようと決心して、縄の付いた首を真っ直ぐに立て直した。

まず、彼は少女に鞭を振るった。私の肛門に差し込み、強引に引き抜いた凶々しい黒革の鞭が、少女の肌を引き裂く不吉な音を二回聞いた。しかし、少女は悲鳴さえ上げない。ただ、全身を絶えずブルブルと小刻みに震わせているだけだ。その震えも、恐怖によるものか、怒りによるものか判然としない。

また二回、鞭音が響いた。少女の反応に変わりはない。全身の震えだけが高まっていく。恐らく少女は、後ろ手に緊縛された不安定な姿勢で首を吊られ、高いテーブルの上に追いやられ、目隠しまでされて視力を奪われてしまったため、自分の肉体にどんな危害が加えられるか、痛みが襲って来る瞬間まで理解できないのだ。いや、突然我が身を襲ってくる激痛を不安の絶頂の中で、ただ受容するしかないのだった。縄で首を絞首される恐怖と、目隠しをされ視力を奪われたことで、何が肉体に襲い掛かってくるのかを予知できぬ恐怖とが、彼女の全身を悲鳴を上げるいとまさえないほどに緊張させているのだ。

なんという恐ろしい責め苦だろうか。拷問よりも過酷に、責められるものの神経をずたずたに引き裂く悪行を、彼は年端も行かない少女に加えているのだ。怒りに強く奥歯を噛みしめた私の口の端から一滴、血が滴り落ちた。

「責め甲斐のない石のような身体だ」

自分で演出した舞台が全然理解できていないように彼は吐き捨て、鞭の代わりに、先ほど少女が激しく反応したヴァイオリンを拾い上げた。無造作にヴァイオリンを掴もうとした指が弦に触れ、調子の狂ったGの音が高く部屋中に響いた。瞬間、少女の震えがやみ、全身を耳にして我が身に降り掛かることを知ろうとした。

彼が振り上げたヴァイオリンが少女の頭越しに私の目に入った。振り上げるとき、ヴァイオリンの胴に空いた共鳴用の穴に空気が擦れる低く咽ぶような音を、私は確かに聞いたと思った。その音は全身を耳にした少女の聴覚を打ち、音を追い続けていた彼女はそのとき、自分の身に起こることの全てを明確に映像化したはずだった。

ヴァイオリンが猛烈な速度で少女の白い尻に打ち下ろされる瞬間。

「ヤメテッ」と叫ぶ声が、鮮明な発音で猿轡の中から聞こえた。

多分、幻聴ではないと思うが、少女の高く澄みきった声は、その後が続いた、したたか

に小さな尻の肉を打つ音と、砕け散るヴァイオリンの音との錯綜狂乱した騒音のラッシュの中でかき消されてしまった。

頂点まで急激に高まった状況に取り乱されてしまったように、彼は手の中に残ったヴァイオリンの竿を振るって二度、なんの反応も示さなくなった少女の尻を打った。

9 崩壊

テーブルのガラス板を踏みしめていた少女の足は、もうガラスの上になく、床から数センチ上のところにぶら下がっている。

黒い縄に首を吊られ、傾いた少女の口の端からは、目を射るほどに鮮やかな赤い血が一筋、滴り落ちていた。

恐らく少女は、尻にヴァイオリンが打ち下ろされる直前に楽器の崩壊を予期し、自らの音楽とともに死に向かって跳んだのだ。

一人相撲の末、取り残された心中者の片割れみたいに悄然とした彼は、やっと舞台の転換に気付いたみたいだった。

絞首されて縄からぶら下がった少女の足下に跪き、形の良い足の指に頬を擦り付けている。

瞬時に駆け抜けたシーンの余りの凄まじさに、私は涙も出ない。不謹慎にも、彼の愚かしい行動を見て、心の中で笑ってさえいたのだった。

ひとしきり少女の足に触れ、唇を這わせていた彼は突然、声を限りに号泣し始めた。高く低く延々と、いつ果てるとも知れずに泣き声は続いた。その間私は白痴のように口を開き、ぼんやりとした焦点の定まらぬ目で、その場の光景を見ていた。

ただ、彼の上げる泣き声だけがうるさく、耳に障った。

長い時が過ぎ、泣き疲れた彼はよろよろと立ち上がり、肩を落としきった姿勢で部屋の隅へ行き、はさみを持って戻って来た。

彼は、ついさっきまで少女を立たせていたテーブルに登り、左腕を黒縄で緊縛されたままの少女の細いウエストに回し、右手で握ったはさみで絞首した縄を切ろうとした。

少女の体重を残酷に支えていた縄が切れると、とても片腕だけでは、物体となってしまった少女を支えることはできなかった。大理石の彫像が倒れるように少女の屍がくずおれ、引きずられるように彼の身体が床に落下した。

少女の屍を胸に載せたまま床に横たわった彼の目と私の目が、そのとき合った。一瞬奇妙なものを見るように、しかめられた彼の目が急に懐かしそうに潤む。胸の上に被さった屍を無造作にどけて立ち上がった彼は、素早く私の横まで来て屈み込み、右手に持ったはさみで私を緊縛した黒縄を切り始めたのだ。

「本当に、いいところへ来てくれましたね。弱っていたところなんですよ。ご迷惑をお掛けしますが、いつもあなたには助けてもらってばかりで感謝のしっばなしですよ」

訳の分からぬ事を呟きながらも、彼は縛り上げていた縄を全部ずたずたに切って私を解放した。

「それにしてもあなたは凄い格好をしていますね。勝手に切らせてもらいましたが、特にいいご趣味とは言えないようです。それに、裸のままでは風邪を引いてしまいますよ。失礼だが、何か変な臭いもしますし、よろしかったら、私の家の浴室で湯をつかってきたらいかがですか」

私は、彼の顔をまじまじと見た。何を言っているのだろうか。彼は記憶を喪失してしまったのか、それとも彼一流の下手な芝居がまた始まったのか、判然としない不気味さを感じた。

なおも話し続ける彼をおいて、私は奇妙な形に捻れて横たわっている少女の屍のそばへ急いだ。まだ暖かさの残っている裸体に手を掛け、捻れた身体を整えたが、後ろ手に緊縛された縄目と、首筋に深く食い込んだ縄が無惨でならない。彼に振り返り、はきみを渡すように言ったが、そっぽを向いたままの彼は、そのままはきみを投げてよこした。全身に熱い怒りがこみ上げたが、少女の姿を整える方が先だ。

苦労して少女の肉体に食い込んだ縄を全て切り取ったが、透き通る肌の上には赤黒い縄痕が死斑のように、縛されたときのままだに残った。

両手で壊れ物を触るように目を閉じさせた少女の顔は、眠るように穏やかだった。縊死したのにも関わらず、体液や排泄物の汚れもない清浄で美しい屍だった。

恐らく、テーブルの端を少女が蹴ったときには、彼女の繊細な心臓は既に停止してしまっていたに違いない。無惨すぎた状況の中でそれは、私にとって唯一の救いに思われた。

私は立ち上がって少女を見下ろした。白く透き通った美しい裸の死体を見ても、特に激しい感情は湧かず、こわばった頬の上を機械的に涙だけが流れた。自ら流す涙の暖かさだけがやけに優しく、この異常な状況の中から私を、部外者であるかのように区別してくれる。

私は、きっぱりとした足取りで部屋の隅に置かれた電話へと向かい、受話器を取り上げ、警察の番号をプッシュした。いつの間にかそばに来た彼が、強い力で通報を押し止める。

「電話はいけませんよ。少女を彼らに渡すわけにはいかないんです。私たちは旅立たなければならないのだから。お願いします」

「旅立ちですって。何を戯言を言っているんですか。一切が終わったんです」

「いや、何も終わってはいません。今、やっと始まったばかりなんです。しかし、それほど時間は残されていません。あなたも、せっかく手伝いに来てくれたのだから早く服を着てください。いつまでも裸でいてもらっては困りますよ」

「あなたは正気でそんなことを言っているの。それとも、これだけのことをしでかしておいて、警察が怖くなったって言うの。とにかく、きちんとした責任を取るのが、あなたに残された常識ってもんでしょ」

「いや、常識以前の事です。しなければならぬ義務の問題ですよ。せっかく来てくれたのだから、とりあえず車を借りますよ」

彼は私から取り上げていたロードスターのキーをポケットから出した。私は素早く彼の手からキーをひったくった。

何を勘違いしたのか「やっぱりあなたが運転してくれるんですね。これで安心です。またご迷惑を掛けてしまいますね。まるで展示会の初日と同じようです。もっとも、走る方向は逆ですがね」と歌うようなバリトンで言った。

相変わらずの戯言と決め付け、私は素裸の身体に威厳を付けるように豊かな胸を張って屋外へと急いだ。後ろから遅れないように付いて来る彼は、私に並ぶようにして落ち着いた口調で、またしても言葉を紡ぐ。しつこく誘い掛ける言葉の中にいつしか、以前と同じような胸ときめく、あやしいバリトンが甦っていた。

私は彼との出会いが再び場面を変え、新たに始まったかのような不気味な情緒が生まれるのを感じ、そんな情感に抗うため素裸の身体を見下ろした。

突き出した両の乳房には、鞭打たれた名残りのミミズ腫れが見える。歩みを進める脚の付け根のデルタには、彼に剃られた後の陰毛が、いがぐり頭のように滑稽に生え出して来ている。何より、歩く度にきりきりと痛む肛門の裂傷と、全身を覆う鈍い痛みが、彼との陰惨な出来事を忘れさせるはずもない。

しかし母屋の引き戸を開け、晩秋の凜とした日差しを全身に浴びると、一切の出来事がまるで、なかったことのように思われ、肌を刺す冷たい外気が私に、新しい舞台の到来をさえ予感させるのだった。

そこまで私は、彼に執着しているのか。

一人の少女の死にも関わらず私は、隣で発せられる彼のバリトンを、清々しい日差しの中で新鮮に、しかも心地よく聞いたのだった。

先ほど彼が「スケベ女」と何度も罵った言葉が再び、間近に見えるやけに澄明な山並みの奥から聞こえたようにも思えたのだが、それももう、古い芝居の台詞みたいに気にならなかった。

ロードスターの背後に回りトランクを開けた私は、紙袋に用意してあった下着とストッキングを取り出し、鮮烈な日差しの中で身に着けた。いずれも、何かのときのために用意して置いたシルク製のものだ。下半身にこびりついた排泄物がいくらか気になったが、なんとと言ってもシルクの下着なのだ。たいがいのことは十分隠し通せると私は踏んだ。

たとえ下着姿でも、豪奢な気分になった私は、全く新しい舞台に立つ、選ばれたばかりのプリマのように誇らしい気分で、後ろにかしづく彼に言ってしまった。

「あの少女を、何処に寄せようと思っているの。この車は残念なことに二人乗りなのよ」
「もちろん、あなたの隣には私が座ります。置いていってもいいのだけれど、やはり可哀想かも知れませんね。私たちのために彼女は、精一杯の事をしてくれたのですから。できることなら、どうしても一緒に連れて行ってやりたいと、あなたも思いませんか。実に可哀想な少女でしたからね」

いつの間にか彼は、二人称を使いだしていた。意識しているのか、いないのか、落ち着いたバリトンからは推し量ることはできなかったが、矛盾した物言いの中に再び、大人の狂おしい時間が還って来たような感じがした。

そして、全てを打ち捨ててすぐ車に乗り込むこともできたのに、彼に話し掛けてしまった私自身、少女を殺したのは私たち二人の仕業ではなかったかとの思いが、脳裏にこびり付いていたのかも知れなかった。更に、ひょっとしたら私のために少女の死が用意されたときえ自惚れる気持ちは、不気味に頭をもたげて来るのだった。

まさかそれほど、あんな変態男にいまさら惹かれるのかと、自分を罵って冷静になろうとすると、足元をすくうように彼が言葉を落とした。

「このトランクに入れてあげるわけにはいかないのだろうか。できることならやはり、彼女を連れて行ってあげたいのですがね」

「ご覧の通りトランクも狭いのですよ。何故、そんなに彼女に執着しなければいけないんですか」

彼女の屍と言えなかった事に舌打ちしたが、彼女を生身に扱ったことでもう勝負は付いていた。工具箱からレンチを出して、スペアタイヤを外しだしたのは私だった。

「これでご要望に応えられるかも知れませんよ」

「ありがとう。あなたは実に頼りになる。難問を解決してもらって本当に感謝しているのですよ。しかし、こんな狭いスペースに彼女を乗せることができるのだろうか。ちょっと心配になりませんか」

少女が乗れなかったら私が残るまでのことであり、むしろ、冷静に考えればその方がいいに決まっている。

「先ず、やってみることでしょう。あなたのお望みなものだから、あなたが責任を持って試してみなくては分からないことでしょう」

「別に私が強く望んだ訳ではないのです。あなたが解決方法を見付けてくれたのがありがたいだけなんですよ」

あいかわらず無責任な言葉だけを演出する彼をおいて、私は母屋へと向かった。当たり前のように彼は、私に付いて一緒に歩を進める。

スタジオに戻り、哀れな少女の屍を前にして「さあ、肩のところを持ってください。私が脚を持つから、一緒に車まで運んでいきましょう」と声を掛けるが、彼は身を堅くして直立するばかりだ。嫌気が差し、彼をおいて身に着ける服を見付けるために寝室に行こうとしたが、黙って彼も付いて来る。構わず彼を従えたまま寝室に入ってワードローブを開け、ゆったりとした丈の長い、細番手の黒いカシミアで編んだセーターを見付けた。頭から被ってみると、ちょうどミニのワンピースの丈に収まり、私によく似合っただけ見えた。

気分を良くした私は、再び彼を従えてスタジオに戻り、横たわった少女の屍を苦勞して肩に背負った。傍らで見つめる彼が言った言葉は一言。万感の思いを込めたような低いバリトンの「ありがとう」だった。

少女の重い屍を背に私は、意外に足取りも軽く、従者を連れた奴隷のように彼を従え、ロードスターへと戻った。しかし、スポーツカーのトランクはさすがに狭く、少女の入り込む余地はないように思われた。素裸の屍の屍をトランクの底に着け、伺うように彼の目を覗き込むと「身体を折り曲げてしまえばいいんですよ」と平然と言った。

あんたがしてみればと、声に出さずに言ったが、行き掛かり上弱い立場に立ってしまった私は仕方なく、少女の屍を横に伸ばし、トランクからはみ出た下半身を両手で抱えるようにして全身の力を加え、まるで、油の切れた折り畳み式の自転車を収納するみたいに折り曲げてみた。その残酷な仕打ちを、脇から見ているもう一人の私が厳しく非難したが、実際に脇にいた彼は、賞賛の溜息を洩らしていた。

既に死体遺棄の当事者になってしまった私は、窮屈な姿勢でトランクに収まった少女に

一瞥を与えただけでトランクを閉じ、彼を急かせるようにして助手席に追い込むや、シートベルトも締めないままロードスターを急発進させた。

ホイルスピンが巻き起こした土煙がバックミラーの中に広がり、さしもの大きさを主張する築三百年の彼の屋敷を包み込んだ。

「何処へ行きたいの」と私が尋ねると彼は、あらかじめ決めてあったように静かな落ち着いたバリトンで応えた。

「海へ」

ロードスターは市街地へ向かう道を外れ、山沿いの間道をインターチェンジへと急いだ。隣に座る彼は、車が走り始めてからずっと、一言も口を利かず眉間に太い皺を寄せたまま目を閉じている。

彼の沈黙の中に私は、先程来度々感じてきた新しい舞台の幕が開く予感がしたが、さっきの状況から考えるとまた、私が主人公にさせられてしまいそうな胸騒ぎがして、全身がむず痒くなってしまう。

オープンのままの車内は、さすがに寒い。

私はヒーターのスイッチを強にしてアクセルを踏み込み、曲がりくねった山道を素早くクリアーしていく。

眩しいばかりの日差しはまだ高い位置にあり、ひそめた眉の上の額を容赦なく焼く。

「日本海へ向かいますね」と言って彼の気を引いてみたが、彼は黙ったまま小さく頷き、車が描くトレースに身をまかせたままだ。しばらく走った後、呑気そうに一言「夕日が見られますね」と言った。

何処にいたって、晴れてさえいれば夕日は見られるとそのとき思ったが、彼の言う意味は、海に沈む夕日のことだと、幾つかのヘアピンカーブを抜けてから思い至った。トランクに屍を乗せた旅路に、海に沈む夕日もないものだと思い、ハンドルを過たないようにしながら彼の顔を伺う。

彼は相変わらず、くねくねと続く山道の先を見据えるような目をして、事もないように構えている。

憎らしくなった私が「高速に入る前に、検問でもあったらどうでしょうね」と意地悪く尋ねても、答えはない。

しかも、意地悪の仕返しのように、不安は全て私を中心に黒々と増殖していくのだった。

トイレを我慢してまで慎重に運転した私は、高速道路に乗り入れたことを祝って思いっきりアクセルを踏み続けた。後はただ海岸まで、時間との勝負だった。

私のロードスターは常に、高速道路上の車列の先頭を追って走り続けた。その甲斐あって私たちは、秋の短い日にも関わらず、日没までにいくらかの余裕を残して日本海を見た。

幾つかのインターチェンジを通り過ぎて、もう後僅かの時間で海に没しようとする夕日

と、光り輝く海とが最も大きく見えた出口で、私たちは高速道路を降りた。後はただ、ひたすらに夕日を追い掛け、海に向かって地方道を急いだ。終いに車道が途切れ、散歩道のような登りの未舗装の細道を、朱に染まった空を目指して上り詰めた先に、その断崖があった。

海へと落ち込みそうな道のどんずまりにロードスターを止めると、彼は待ちかねたかのように、車が停止しきらない内にドアを開け外へ飛び出した。フロントガラス越しに、地面から飛び上がるようにして断崖の端へ急ぐ、浮かれた幼児のような姿が見える。

オープンにしたままの車内に吹き込む、きつい潮の香りをのせた強風が北国の寒さを届ける。私は、走って行く彼の姿を逆光の中に眩しく見ながら、まずロードスターの幌をしっかりと下ろし、寒風から身を守った。

幌で密閉された車内に、じきヒーターが効きだし、漲った温気の中で人心地付いた私に、フロントガラス越しに見える彼の後ろ姿が、妙に現実離れをした幻のように小さく見えた。

限りなく小さく見える彼の黒いシルエットの向こうで、いましも水平線に没しようとする夕日が最後の煌めきを、天と海とを峻別するかのよう輝かせた。小さな染みとなった彼の漆黒の影の深奥で、輝ける海はその瞬時に変わる波形に極まった落日を呑み込み、驕り高ぶった豪華な黄金色を一身に纏いきったのだった。しかし、海にかすめ取られた最後の輝きを、吝嗇に惜しむかのように空は、瞬く間にその茜色の輝きを減じ、漆黒の闇へと向かって一散に走り去った。

残された海の輝きもまた儂く、瞬きする間もなく暮れきってしまい、おぼろな冥界の中に小さく、彼の黒々とした影を残すだけだった。

そのとき、影となった彼が、まるで祈りを捧げるように、暮れきった海に向かって突っ伏したように見えた。やがて轟々と吹き荒ぶ海風に混じって、呻くように啜り泣く声が聞こえて来たように思ったのだが、ヒーターのよく利いた車内の私には、幻聴であったのかも知れなかった。

断崖の突端と思われるところで、しゃがみ込んだまま戻って来ない彼を訝り、車外に出て薄明の空と海に向かって歩いて行った私の眼前で急に彼は、この寒さの中で服を脱ぎだしたのだった。

吹き荒ぶ季節風を真っ向から浴びて、海に向かって素裸で立った彼は、いつのまに用意していたのか、愛用の黒い麻縄を取り出し、自分の裸身を縛り始めた。凄い早さで的確に縄を操り、菱縄縛りに自分を縛り上げた彼は、尻を突き出した格好で屈み込むと、あの黒

革の鞭を右手で握り、左手の指で押し広げた肛門に、えいっ、とばかりに鞭の柄を突き刺していた。鋭い痛みが見ている私にまで伝わり、私は自分の肛門をきゅっと引き締めてしまった。

にっこりと妖艶な笑みを浮かべて私を見た彼は「後ろ手に縛ってください」と静かなバリトンで言ったのだ。

言われるままに私は、彼の両腕をきつく背中に回し、高手小手に縛り上げてやった。

後ろ手に緊縛されたまま海を見ていた彼は、首だけを私に振り向け、さも愉快そうな顔で私の目を見つめ、聖書の一節を暗唱するみたいに風に負けぬ豊かなバリトンを響かせた。「夢のような話をしようか」

朗々とした声が風にかき消される前に、彼は踊るような足取りで断崖から海へ身を躍らしてしまった。

私の視界から彼が消え去り、しばらくの間「ユメノヨウナハナシヲシヨウカ」と、こだまのように後を引く声だけが聴覚の底で響いていたが、それも虚しく、鳴り響く風と海鳴りの音に紛れて行ってしまった。

彼のカシミヤのセーターに吹き込む風は寒く、肌を突き刺す冷気から逃げるように走って車内へと戻った私は、大きく深呼吸した。

ヒーターの暖かさでやっと人心地着いたが、車のトランクには死体が一つある。多分、見つかることのない死体がもう一つ、輝きを失った海にある。そして私は確実に、生き残ったものとして取り残されてしまったのだった。

がらにもなく私は、背筋の中まで凍り付くような孤独を全身に感じ、暖かな車の中で身震いした。透き間風に乗って、するはずもない腐臭までが後ろのトランクの方から漂い出し、私を脅迫する。

きつともう、私は帰らなければいけないのだ。つい二か月前まで、どっぷりと首まで浸かっていた喧噪と懐疑に支配された日常へと、私は召還されるときなのかもしれなかった。

何が「夢のような話をしようか」だ。そんなもの誰が聞きたいものか。夢のような狂おしい体験を、二か月の間味わって来たのはこの私だ。夢のような話ができるのは私しかないのだ。

彼は、私への当て付けで海に身を投げたのか。それとも何処か、遠い世界と呼んでいた場所へと旅立ちを気取って見せたのか。別に、どうって事はないと私は思ったが、ぼっか

りと空いた空間がどうしようもないほどの広さで身体の中に広がって行く。

その空間の中に今、幻のように薄く、車のトランクにいる少女の姿が小さく浮かび上がった。広漠とした空間に浮遊する埃のように、哀れな少女の幻影は、ゆらゆらとあてどなく彷徨っている。

しかし私は、無明の闇にさすらうわけにはいかない。用意されるはずの新しい舞台の上に、私は情熱のプリマとして中央に立たなければならないのだ。それが、この二か月の間、私の官能が彼の官能との間に結んだ默契のはずだった。

私は「よしっ」と声を掛け、ロードスターのギアをバックに入れた。バックミラーに映る漆黒の海と空とに呪詛の呟きを浴びせながらアクセルを踏み込み、視界の効かぬ細道で強引にスピターンする。車体の底に打ち当たる小石にも、ふらつくハンドルにも構わず、私は無我夢中でロードスターを操り、凶々しい断崖を後にした。

舗装道路に出た私はスピードを上げ、ひたすら街の明かりを求めて疾走した。長い下り坂が終わって、危険なほど鋭いヘアピンカーブをクリアした直後、暗闇を引き裂いてきたヘッドライトの光が急に色あせた。

闇に慣れた目が眩しく思うほど唐突に現れた繁華街は、四車線の通りの両側にカクテルライトの街灯が並び、まばゆいばかりのショウウインドが続いていた。私は歩道寄りの路側帯にロードスターを停車させ、目をしばたいて街の様子を観察した。

映画のセットのように明るい街は、一キロメートルほどしか続いていないようだった。車の前方六百メートルの辺りはもう、明かりも見えず黒い暗がり広がっている。なんて街だと、私は思った。こんな海沿いのへんぴな土地に、悪い冗談のように都会風な街路が開けている。それに、早い時刻にも関わらず人通りもなく車も通らない。

また、幻影を見るのかと思い窓を細く開けてみると、微かに潮の香と寒い風が吹き込んで来た。明かりのつきる辺りに赤色灯を認めた私は、ゆっくり車をスタートさせた。

潇洒な飾りタイルを巡らせた壁面に、昔ながらの赤灯をぶら下げた警察署の前に車はすぐ着いてしまった。

恐らくこの光眩いだけが取り柄の街は、原子力発電所が作ったモデルタウンに違いないと私は一人納得し、車窓から古風な石段の先にある警察署のモダンな自動ドアを見上げた。

どうしようかと、体内時計できっちり一分迷った後、私はシートベルトを外しカー一杯ロードスターのドアを開けた。

やはり私は、トランクにある少女の死体を何とかしなければ、新しい檜舞台に上がることは出来ないのだ。

三段ある警察署の石段を足早に登り切ると、自動ドアの前に制服姿の警官が杖を持って立っていた。神社の唐獅子と思い込み、ぞんざいに会釈をして通り過ぎようとしたら、自動ドアのセンサーに感知される前に「どうかしましたか」と声を掛けられてしまった。

仕方なく振り返った私の目に、好奇心たっぷりの若い制服警官の顔が映った。テレビでいつか見たことがあるような可愛い顔付きをした彼は、ブラウン管の中にでもいるように微笑んでいた。

「いえ別に、用と言うほどのことではないのですが」と、言葉を呑み込んでみたが、警官は先を促すように魅力的な微笑に更に磨きを掛けた。

この努力に応えなければ、人でなしになってしまいそうな気がして「実は私の車のトランクの中に、死体が入ったままなのでお寄りしてみたいんです」と言ってみた。

「えっ」と、警官の微笑みが口の端でこぼれてしまう。頭の中の混乱が目に見えるようだ。

でも当たり前なことだ。子猫を拾ったかのように死体の話をすれば、誰だって話し手の頭を疑う。私は作り笑いを浮かべながら右手に持ったキーを警官の目の前で振り、彼を石段の下のロードスターへと誘った。

若い警官の視線を背後に感じながらトランクにキーを差し入れた私は、もし少女の死体がなくなっていたらどうしようかと、急に不安がこみ上げキーを回し掛けた指の動きが止まってしまった。

「僕が開けましょう」と言って私に代わり、警官がキーを回しトランクを全開にした。

「んー」と警官が声にならぬ感情を露にしたとき、私はやっとなで胸をなで下ろしていた。

大きく開いたトランクの中に、相変わらず素裸で窮屈そうに身体を折り曲げた少女の屍があった。

「ブチョウ」と頓狂な声を上げ、警察署にたふたと駆け戻る若い警官に見捨てられた格好の私は、トランクに横たわる少女の横顔をじっくりと見た。

数時間前まで、あれほど美しいと思った少女の死に顔は、街灯の光線の加減か、醜く歪み、人の顔とも思えないほどの悲惨さを呈していた。

「あんたが殺ったのかね」

背後から掛けられた濁った声音に振り向くと、背広姿の男が二人、先ほどの若い警官を

従えて立っている。

「まあ、事情を聞こうじゃないの。あんたの顔も結構痛めつけられているようだし」

年かさに見える男が言い終わらない内に、若い方の背広が私の右腕をしっかりと捕まえた。逮捕される恐怖より私は、年かさの男が言った顔のことが気に掛かった。多分、今朝彼にさんざん頬を張られた痕と、鞭打たれた痕がミミズ腫れとなって残っているに違いなかった。

警察署の中に入り、迷路のような廊下と階段を連れられるままにたどった後、私は、あまり快適とは呼べない狭くて寒い取調室で、二人の刑事とともに数時間を過ごした。

せっかく決意して社会復帰をしたはずの私にとって、この数時間はやはり、ビジネスの現場と似た緊張感を私に強いた。疲れ切った頭と身体で私が話したこととは微妙に、しかし決定的に違う調書に仕方なくサインした私は、死体遺棄の現行犯として即刻逮捕されることになった。

これで、海に沈んだ彼も、私も、少女も、一応の身の振り方が決まったのだった。

「また明日、詳しく聞かせてもらいましょう」と言った年かさの刑事の言葉を合図に、私の両手首で冷たい手錠が音を立てた。

しばらくぶりで還ってきた社会は、やはり私に冷たかったと、訳の分からぬ、思えば彼一流の拗ねごとを口の中で呟きながら、私は留置場へと連行された。

まるで品物を受け取るように、私を連行して来た若い刑事の書類にサインした留置場の警官は手錠を外し、部屋の中央に私を立たせた後、奥に向かって声を掛けた。だらしない声が答え、グラマラスな婦人警官が姿を見せ、私の前に立った。

「服を脱ぎなさい」と、低い声で彼女が言う。

「えっ」と、絶句した私に「裸になるのよ」と続ける。

また私は、人前で裸にならなければいけないのか。しかも、官能のときめきを演じる舞台の幕が下り、彼が消え失せ、私を待つ新しい舞台も第二幕もまだ、予感の中にしかないと言うのに。また私が全裸のプリマを演じるのか。

ひょっとして、別の夢が始まるのかと血が上った頭で考え、答えの出ぬまま私は、命じられるままに、また素っ裸になった。何のためか膝を折った屈み込むような恥ずかしい姿勢を取らされた後、婦人警官は手に紙コップを渡した。尿をコップに採れと言うのだ。弱々しく抗議した私に、婦人警官は規則だからと高圧的に答える。

何が変わったのだろうと私は思った。彼がいなくなっただけで、私のすることは何も変

わっていない。彼女が望むならば浣腸なしでも、うんちを採ってやってもいいときえ思った。

私は、追い立てられるようにドアのない便所で屈んだ。目の前のガラス越しには男の警官の姿さえ見える。下半身に力を入れ、おしっこを出そうとするが思うように出ない。

いつしか、全身が熱くなり涙がこぼれた。涙は、頬でミミズ腫れになった、彼の残した鞭痕を伝って全身の傷に滲みた。

そのとき、警官たちが詰めたガラス戸の中から、FMラジオでもあるのだろうか、聞き慣れた音楽が聞こえて来た。

「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ第一番」の調べに全身が耳になった。

「バッハがお好きなのですか」と言うバリトンが、また聞こえて来るような気がして。私は白い便器を跨いだ丸出しの股間をなぶる、冷たい透き間風に性器を晒しながら、熱い予感を裂けた肛門に感じたのだった。

きっとまだ、あの夏の日から見始めた夢は覚めず、また新しい深みへと陥って行くのだろう。

私は、渾身の力を振り絞り、

「うわっー」と高らかな叫び声を、いつ果てるともなく留置場いっぱい、轟かせ続けた。

完